2005年度
兵庫教育大学大学院学位論文

現代日本語における動静関係の相対性に関する基礎的研究

教科・領域教育専攻
言語系(国語)コース
M04175C
黛　穂高

目　次

序章　　はじめに …… 1

第１章　現代日本語における動静関係の相対性について（１）…… 3
　第１節：問題の所在
　第２節：主格と斜格における動静関係の相対性
　第３節：まとめ
　注

第２章 関連する諸問題 …… 18
　第１節：用字法による意味の差別化
　第２節：中間的現象
　第３節：主格と与格の大きさにかかわる問題
　第４節：まとめ
　注

第３章　現代日本語における動静関係の相対性について（２）…… 30
　第１節：問題の所在
　第２節：話者と主格名詞における動静関係の相対性
　第３節：まとめ
　注

第４章　言語表現における図地反転とスキーマ分析の複合モデル ‥ 44
　第１節：問題の所在
　第２節：図地反転に基づく多義分析（１）－「失う」の場合－
　第３節：図地反転に基づく多義分析（２）－「奪う」の場合－
　第４節：関連する諸問題
　第５節：まとめ
　注

第５章　格標示の動静関係に関する補説 …… 57
　第１節：動静関係と格標示に関する一般原則
　第２節：他動性に関する補説
　第３節：まとめ
　注

終章　　結論 …… 70

参考文献 …… 72

序章　はじめに

本研究では、動静関係を含む現代日本語を考察対象とし、知覚心理学の概念から図地分化(figure-ground distinction)および、図地反転(figure-ground reversal)の原理を援用することで、事象における動静関係が絶対的なものではなく、知覚の様式によって相対的であることを示すつもりである。詳説は本論に譲るが、ここで言う動静関係とは、簡略に言うと＜当該の事象の中で主たる変化を被るもの＞と＜当該の事象の中で静止していて変化を被らないもの＞の関係を言う。さて、図地反転における、「図(figure)」と「地(ground)」の対立という認知図式は、汎用性の高いものであり、言語構造の様々なレベルにあらわれることが知られている。本研究では、単に図地反転と類似した現象を紹介するのではなく、より積極的に、図地反転を用いなければ説明できない言語事実を取り上げる。具体的には、把捉事態に対する格の配置関係が通常と異なるケースに着目し、これを図地反転の原理から分析するとともに、多義現象をスキーマによって記述したうえで、特殊な意味用法が図地反転とスキーマ理論の複合的なモデルによって説明されうることを示すことで、最終的には、言語能力と他の認知能力が関連していることを導きたい。なぜならば、本研究では認知言語学的なアプローチを試みており、認知言語学では言語を認知構造の重要な一部と考え、文構造も概念上の図式が表現されたものと見ているからである。なお、本研究に必要な文の基本的構造については第５章の第１節で論証するつもりである。また、本研究では、あえて、単義論的なアプローチを採用する。これによって、より自然で包括的な分析が期待できると思われるからにほかならない。

本研究の構成は、次のとおりである。第１章では、述語が同じで格パタンも同じでありながら、格レベルで変化を被るものと変化を被らないものが入れ替わっているケースについて、「図地反転」の概念を援用しながら分析し、そこに一定の条件が課せられることを示す。第２章では、第１章の分析に関連する問題として、①用字法の問題、②他動詞構造におけるノーマルな格標示と図地反転が作用している文の中間的な性質を持つ文の問題、③図地反転が作用する際の主格と与格の大きさについての３点を論る。第３章では、言語表現上の図地反転が成立する条件として、第１章で議論してきたこととは異なる成立条件について検討する。第４章では、第１章と第３章の分析をふまえ、スキーマ分析によって多

義構造分析をするうえで、図地反転の原理を援用することによって説明が可能になる事例を取り上げる。具体的に取り上げるのは、動詞「失う」と「奪う」の多義現象である。第５章では、格標示における動静関係の基本的なパタンを振り返るとともに、他動性という概念を用いて動詞が自動詞と他動詞に二分されるのではなく、連続的であるとするものについて触れておく。なお、注は各章末に付してある。

本論に入る前に、データ(言語事実)のソースと用語について確認しておく。本研究で用いた例文は、筆者自身が作例をしたもののほか、インターネットの検索サイトやテレビ、ラジオなどから採取、または修正を加えて使用した。用語としては、一般言語学において、「格交替(case-alternation)」、「格標示(case marking)」が訳語として通用しているため、本研究でも、それにしたがう。また、本研究においては、「典型的な自動詞構造」という用語が「対格を実現せず、主たる変化が主格成分に生じる構造」を指し、「典型的な他動詞構造」が「対格を実現し、対格に主たる変化が生じる構造」を指すものとしている。もちろん、単純に自動詞、他動詞が峻別できないことを承知したうえでの措置であるが、「典型的な他動詞構造」「典型的な自動詞構造」については、第４章の第１節で取り上げ、自動詞、他動詞の認定をめぐる問題については、他動性との関係で第４章の第２節で詳説する。なお、格については名詞に「ガ」が付いたものを主格(ガ格)、「ヲ」が付いたものを対格(ヲ格)、「ニ」が付いたものを与格(ニ格)、「カラ」が付いたものを奪格(カラ格)、「デ」が付いたものを具格(デ格)として扱っていくものとし、主格(ガ格)以外の格を総称して斜格と呼ぶ。一覧化すると下の表のようになる。また、「動作者(動作主体、移動主体)」や「対象」という言葉を用いる場合があるが、この用語は意味役割を表しており、必ずしも主格が動作者を、対格が対象を標示するわけではない。なお、「ＮＰ」は名詞句を表している。

格助詞	格		
ガ	主格	ガ格	主格
ヲ	対格	ヲ格	斜格
ニ	与格	ニ格	
カラ	奪格	カラ格	
デ	具格	デ格	

格助詞と用語の関係

第１章　現代日本語における動静関係の相対性について(１)

第１章では、述語が同じで格パタンも同じでありながら、格レベルで変化を被るものと変化を被らないものが入れ替わっているケースについて、知覚心理学の「図地反転」という概念を援用して分析をする。[1]

第１節：問題の所在

一般的に、述語が同一で格標示のパタンが同じであれば、同じ格で標示された名詞句の動静関係が同じであることは自明のように思われる。ここで言う動静関係とは、＜当該の事象の中で主たる変化を被るもの＞と＜当該の事象の中で静止していて変化を被らないもの＞の関係を言い、次の例によって具体的に例示される。[2]

(１)(ａ)　ボールが外野スタンドに入る。
　　(ｂ)　新入生が軟式テニス部に入る。

詳しい議論に入る前に、もう少し「動静関係」について説明を加えておこう。(1a)における「ボール」や「外野スタンド」のように、名詞句として事象に関与する実体を「参与者(participant)」と呼ぶとする。１つの事象の中に複数の参与者があるとき、上述の例が示しているように、述語が表す変化によって＜相対的に大きな変化を被る参与者＞と＜相対的に変化が小さい参与者＞が認められ、こうした２つの関係を本研究では独自に「動静関係」と呼ぶこととする。本研究での議論において重要なのは、動静関係にある２つの参与者の格標示が一定不変ではなく、発話者の視点によって変化しうるという点である。こうした可変性を「動静関係の相対性」と呼ぶこととし、本研究において、全編にわたり分析の中心的な課題とするつもりである。[3]

さて、(１)のペアにおいて、(1a)も(1b)も述語は「入る」という同一の動詞であり、格標示も＜ＸがＹに＞という同一のパタンをとっているので、＜当該の事象の中で主たる変化を被るもの＞はガ格の「ボール」や「新入生」であり、＜当該の事象の中で静止していて変化を被らないもの＞はニ格の「外野スタンド」や「軟式テニス部」である。このとき「外野スタンド」や「軟式テニス部」に変化がないかと言えば、どちらにおいても「ボール」や「新入生」が存在しなかった状態から存在する

状態へと変化しているが、それらの変化は「入る」という変化ではない。

もちろん、格パタンが違えば、名詞句の動静関係は変わる。(２)のペアは、述語は同一でありながら、格標示が異なる。

(２)(ａ)　花が庭に開く。
　　(ｂ)　父が本を開く。

(2a)の格標示は、＜ＸがＹに＞というパタンをとっており＜当該の事象の中で主たる変化を被るもの＞はガ格の「花」であり、＜当該の事象の中で静止していて変化を被らないもの＞がニ格の「庭」にあたる。一方、(2b)の格標示は＜ＸがＹを＞というパタンであり、このときガ格の「父」に変化はなく、むしろ変化を被るのはヲ格の「本」である。

(３)のペアは、(１)と格標示は同一であるが、違う動詞が述語に使われている。

(３)(ａ)　体調不良が試験の成績に影響した。
　　(ｂ)　タミフルがインフルエンザに効いた。

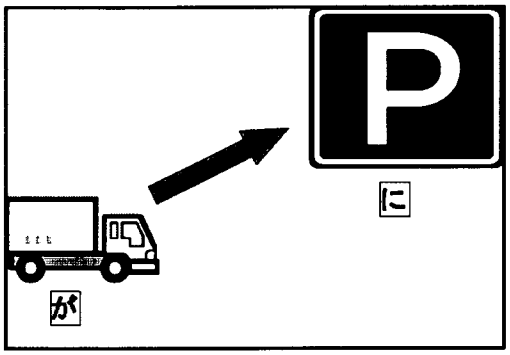
(３)のペアでは、格標示が＜ＸがＹに＞という(１)と同じパタンをとっているが、(３)において、＜当該の事象の中で主たる変化を被るもの＞は、ニ格の「試験の成績」や「インフルエンザ」であり、＜当該の事象の中で静止していて変化を被らないもの＞が「体調不良」や「タミフル」にあたる。

ここまでの例文で分かるとおり、述語や格パタンが違えば、名詞句の動静関係が変わることは何ら疑問はない。ところが、述語も同じで格パタンも同じでありながら、格レベルの動静関係が異なる場合が観察される。具体的には次のようなペアである。

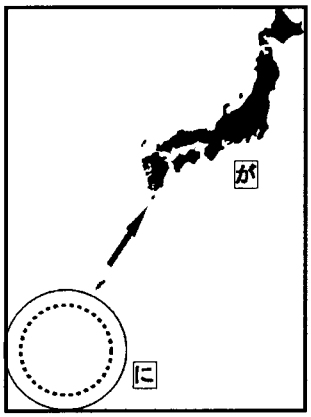
(４)(ａ)　トラックが駐車場に入った。
　　(ｂ)　日本列島が暴風域に入った。

(４)の例は、どちらも対格(ヲ格)が実現しない自動詞構造であり、典型的な自動詞構造の文では、主格(ガ格)ＮＰが主な変化を被ることが知ら

れている。(4a)が描く事態は、[図1a]で示されるように、「入る」という事象において、位置変化(移動)を被るのは「トラック」であり、「駐車場」は基本的に位置変化を起こさない。この関係を記号化した(4a)では、移動主体の「トラック」が主格(ガ格)で標示され、位置変化を被らない「駐車場」が与格(ニ格)で標示されており、自動詞構造としてはノーマルな格標示である。一方、(4b)が描く事態は、[図1b]が示しているとおり、「入る」という事象において、移動するのは「暴風域」であり、「日本列島」は位置変化を被らない。この関係を記号化した(4b)において、移動する「暴風域」は主格(ガ格)ではなく与格(ニ格)で標示され、位置変化を被らない「日本列島」が主格(ガ格)で標示されている。つまり、(4b)では移動するものが与格(ニ格)で標示され、移動しないものが主格(ガ格)で標示されており、(4a)とまったく同じ格パタンを持ちながら、(4a)と格の動静関係が逆転してしまっている。[4]



[図1a]



[図1b]

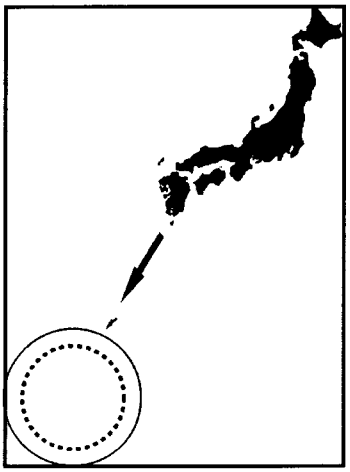
(4)に挙げた現象は、特殊な文脈の特殊な表現ではなく、我々が日常的に用いる卑近な表現にも観察される。このような現象に対して、動詞「入る」が(4a)と(4b)で異なるというアプローチも可能かもしれない。その場合、(4a)の「入る」は「〈主格が動く〉入る」であり、(4b)の「入る」は「〈与格が動く〉入る」として、多義として扱うということになる。本研究では、あえて、(4)の「入る」を多義とはせず、単義論的なアプローチを採用する。これによって、より自然で包括的な分析が期待できると思われるからにほかならない。そうした包括的な分析の成果につい

ては、その評価を終章で検討することとし、次節以降で、具体的な分析を進めたい。[5]

第２節：主格と斜格における動静関係の相対性

さて、もう一度、例文(４)に戻っていただきたい。(4a)の「トラックが駐車場に入った。」は、主格ＮＰ「トラック」の述語として移動動詞「入る」が使われており、「トラック」が駐車場の外から与格ＮＰ「駐車場」の内側に移動するということを表している。このとき、主格ＮＰ「トラック」が物理的に移動するという動き(＝変化)をしている一方、与格ＮＰ「駐車場」には位置的な変化が起こらない。(4a)は主格ＮＰが与格ＮＰよりも相対的に大きな変化を被るという意味で典型的な自動詞構造をなしており、ノーマルな格標示を受けている。[6]

一方、(4b) の「日本列島が暴風域に入った。」という文を、(4a)とまったく同様の手順で解釈すると、[図1c]の矢印のように主格ＮＰ「日本列島」が物理的に移動し、与格ＮＰ「暴風域」に近づいていくことになる。しかし、当然のことながら、現実には「日本列島」は動くことはなく、[図1b]のように「暴風域」が「日本列島」のほうに移動していくのであり、物理的に変化しているのは与格ＮＰ「暴風域」にほかならない。(4a)と同じように述語に「入る」という移動動詞をとり、「日本列島」を主格ＮＰとして用いているにもかかわらず、現実に移動するのは与格ＮＰ「暴風域」のほうであって、主格ＮＰ「日本列島」が空間的に移動することはない。現実には移動しない「日本列島」が移動するかのように言語化されている一方で、実際に移動する「暴風域」が、移動するように描かれていない。一般化すると同じ構造の文であるにもかかわらず、格成分の役割が反転しているということから、この現象を説明する仮説として次のようなものを提案する。



[図1c]

【言語事象と知覚特性の互換性に関する仮説】

動いているものを固定すると、静止しているものが動くよう

に知覚される

この原理を(４)のペアに適応すると、(4b)において、動いている与格ＮＰ「暴風域」の動きを固定することで、静止している主格ＮＰ「日本列島」が動いているように知覚されていると分析できる。ただし、この原理は無条件に適用されるわけではなく、一定の条件のもとに起こることを付け加えなければならない。(4b)において、主格ＮＰ「日本列島」は「入る」という移動変化は起きていないものの、一方では、「日本列島」では雨が降ったり風が強くなるといった変化が新たに生じていることに注意されたい。このように主格に述語とは別の変化が起きなければ、(4b)のような表現は生じないであろう。ここから、【言語事象と知覚特性の互換性に関する仮説】の成立条件①として、次のことが言える。

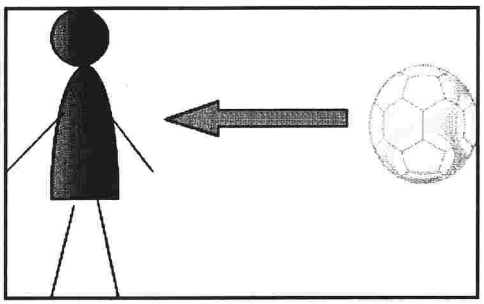
成立条件①＝結果として主格に別の種類の変化が生じるとき

(4b)に関して言えば、別の種類の変化とは、動詞「入る」が表す変化とは別に、雨が降ったり風が強くなるといった変化を指すことは言うまでもない。

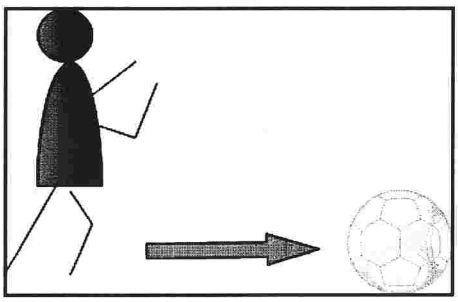
成立条件①の重要性は、例文(５)で具体的に確認できる。

(５)(ａ)　ボールが直汰朗にあたった。
　　(ｂ)　直汰朗がボールにあたった。

今、[図2a]のように「直汰朗」は位置的に静止しており、そこに向かって「ボール」が空間的に移動し、「直汰朗」と接触する状況を描くとしよう。そのとき、自動詞構造の文では、(5a)のように、物理的に移動している「ボール」を主格で標示し、静止している「直汰朗」を与格で標示するのがノーマルな格標示である。一方、(5b)は[図2b]のように主格ＮＰ「直汰朗」が、与格ＮＰ「ボール」のほうに移動していって「あたる」ということを描くこともできるが、(5a)と同じく、[図2a]のように「ボール」が移動してきて「直汰朗」にあたった状況を表すこともできる。その場合、(5b)は(5a)とまったく逆の格標示にもかかわらず自然に容認することができる。



［図2a］



［図2b］

客観的に言えば、(5b)は非論理的な文に見えるが、上述の【仮説】に、したがえば、動いている「ボール」を固定することで、静止している「直汰朗」が動いているように知覚されるという分析が有効である。ただし、［図2a］の状況で(5b)の「直汰朗がボールにあたった」が容認されるのは、「直太朗」がドッジボールで「ボール」にあたって、外野に出るなどの地位に変化が起きたり、怪我をするというような物理的変化が起こるような文脈においてである。主格ＮＰ「直汰朗」には「あたる」という変化とは別に、地位の変化や物理的な変化が起こっているのであり、そこに、成立条件①＜結果として主格に別の種類の変化が生じるとき＞の必要性が確認される。一方で、(5b)のような格標示の文が、成立条件①がないときには、起こらないことは、(5c)や(5d)が容認不可能になるという事実から具体的に確認できる。

（５）（ｃ）　？案山子がボールにあたった。
　　（ｄ）　？直汰朗がタンポポの綿毛にあたった。

上の(5b)が容認可能であったのと対照的に、普通(5c)の容認度が低いのは、単に与格ＮＰ「ボール」と接触するだけでは、主格ＮＰ「案山子」に述語で表す変化とは別の変化が起こるとは解釈できないためと説明できる。もし「ボール」と「案山子」の接触が、強い衝撃をともない、「案山子」に物理的な損傷を生じるような場合には、「案山子」に述語で表すこととは別の変化が起こっており、(5c)の容認度が回復することが予想できる。一方、(5d)においては、与格ＮＰ「タンポポの綿毛」が人間である主格ＮＰ「直汰朗」に「あたる」ことによって、「直汰朗」に「あ

たる」とは別の変化を起こすことは不可能なことから容認しづらいと説明される。いずれにせよ、(5c)においては、「案山子」に述語で表すことと別の変化が生じるかどうかということと、容認度には相関関係があり、(5d)においては、「タンポポの綿毛」が「直汰朗」に述語で表すことと別の変化を与えることができないことから容認しづらいということであり、成立条件①が存在しなければ(5b)のような格標示の文は容認できないということが分かる。このことから、本研究の分析が現象を正しく予測していることが伺える。

上述の分析は、次の(６)が示すように他動詞構造の文にも有効である。

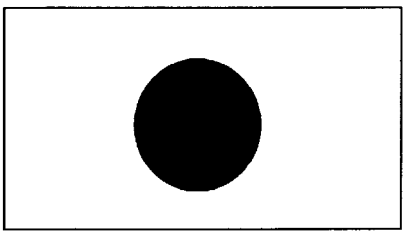
(６)(ａ)　会議の途中で太郎がピンマイクを外した。
　　(ｂ)　会議の途中で太郎が席を外した。

このような対格(ヲ格)を実現する典型的な他動詞構造の文では、主たる変化が対格ＮＰに生じることが知られている。(6a)において、対格(ヲ格)で標示された「ピンマイク」が、主格ＮＰ「太郎」の動作によって、服などに密着していた状態から離されるという変化を被っているという点で、典型的な他動詞構造の文であり、ノーマルな格標示を受けている。これに対し、(6b)では主格ＮＰ「太郎」が対格ＮＰ「席」に力をおよぼすところまでは(6a)と変わりないものの、主たる変化は「席」には起こらない。(6b)は主格ＮＰ「太郎」が対格ＮＰ「席」から立って移動し、その場から離れることを表しており、主たる変化は、対格ＮＰ「席」ではなく、主格ＮＰ「太郎」に生じている。主格に主な変化があるという点で、(6b)はノーマルな格標示を受けておらず、一見、非論理的な文に見える。ここで他動詞構造の(6b)にも、自動詞構造の(4b)や(5b)と同じように、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】を使って、分析を試みる。現実には移動している「太郎」の動きを固定すると、静止している「席」が移動しているように知覚され、その関係を記号したのが(6b)であり、「太郎」を主格で、「席」を対格で標示したと説明できる。しかも、この場合でも成立条件①は保持される。主格ＮＰ「太郎」は、その場からいなくなるという移動をしており、主格の「太郎」に「外す」という変化以外の変化が起きているからである。

ここで理論的背景として、知覚心理学における図地反転(figure-ground reversal)という原理を導入する。図地分化(figure-ground distinction)および図地反転は、知覚心理学において最もよく知られた概念と言っていい。図地分化というのは、知覚した対象を図(figure)と地(ground)に振り分けることをいい、人間の知覚にとって基礎的な認知能力で、知覚のレベルにとどまらず、より高次のレベルでも保持されることが知られている。要点を以下の(ア)から(ウ)に示す。[7]

(ア) 人間は事象を図と地に振り分けて知覚する。これを「図地分化」と言う。
(イ) 図とは知覚対象の中心的なもので、地とは背景になるものを言う。
(ウ) 図と地は入れ替わることによって、異なる価値を生じさせることがある。これを「図地反転」と言う。

(ア)から(ウ)に簡単にコメントしておきたい。私たちが、ある対象を知覚するとき、その知覚対象の際だった部分に、焦点をあてながら知覚していく。その知覚対象の際だっている部分、あるいは焦点化されている部分、前景化されている部分を「図」と呼び、その背景になっている部分を「地」と呼ぶ。[図３]において、中心にある円が際だっており、中心的な部分であることから「図」ということになり、それ以外の白い部分が背景として働いており「地」ということになる。付け加えておけば、「図」は知覚の中心的な部分ではあるけれども、背景となる「地」がなければ知覚することができない。

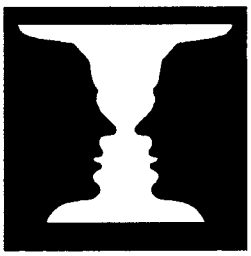


[図３]

図地分化を我々の経験にたとえると次のようになる。一面の霧に取り囲まれた中では、視野全体が均質な光で満たされ、形を知覚することはで

きない。このとき、「図地分化」は生じていない。そこで、突然、人が眼前にあらわれたとしよう。そのとき、人が霧と異質な領域として分節され「図」として知覚されるのである。一方、形の知覚が生じていなかった霧は人の背景として「地」の役割が与えられるのである。このとき、「図地分化」が生じたことになる。

また、「図地反転」の原理は、次のような図によって端的に示される。[図４]は有名な「ルビンの杯」という絵であるが、黒い部分を「図」として見た場合、向き合った顔に見え、白い部分は「地」となる。このように「図」というのは知覚的な中心であるが「地」なくしては知覚することはできない。一方、黒い部分を「図」として知覚した場合、向き合った顔に見えるが、白い部分を「図」として知覚した場合「杯」に見える。この場合、黒い部分は「地」の役割となり、「図」と「地」の役割が反転している。[図４]において、まったく同じものを見ているにもかかわらず、知覚の仕方によって異なったものに見える。このように客観的には、同じものが知覚の仕方によって違う価値を持つことを「図地反転」と言うのである。[8]



[図４]ルビンの杯

上述した、例文(４)～(６)の(ａ)(ｂ)の関係、つまり、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という上述の【仮説】は、「図地反転」の原理が言語事象に反映されたものと見ることができる。

図地反転の原理を導入したうえで、もう一度、例文(６)を見ていこう。(6b)のような現象に対して、定延(さだのぶ)(1990:49-50)は＜場所の変化＞と＜状態の変化＞という２つの変化を区別したうえで、どちらが高く評価されるかという観点から分析している。定延は、通常＜場所の変化＞を＜状態の変化＞よりも高く評価するとしているが、場合によっては＜状態の

変化＞が高く評価されることがあるとしている。この分析方法にしたがえば、「太郎」がその場から離れるという＜場所の変化＞よりも、「席」に「太郎」が座っていた状態から、いなくなった状態になったという＜状態の変化＞が高く評価されたために、「席」が対格で標示されたということになる。しかし、(6b)が描く状況に関して、「席」が＜誰かが座っている状態＞から＜誰も座っていない状態＞に変化したこと(度合い)と、「太郎」が空間的に位置変化したこと(度合い)の大きさを比べたとき、前者のほうが大きいと判定する客観的な基準は見出されない。このようなケースでも、本研究が言うように、図地反転の原理を用いれば、通常なら空間的位置変化を被るはずの「太郎」を固定することで、本来なら変化を被らないはずの「席」が動くように知覚され、対格で標示されたと説明することが可能になる。こうした例から、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という一般化が、他動詞構造でも見出されることが分かるであろう。さらに言えば、本研究の分析を採用すれば、(6a)と(6b)に見られる動詞「外す」の意味を多義として扱う必要はないということになるのである。[9]

さて、もう少し＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】のもと、＜結果として主格に別の種類の変化が生じるとき＞という成立条件①で説明される類例を挙げてみよう。ここまで分析した自動詞構文は斜格に与格をとっていたが、(７)のペアは斜格に奪格(カラ格)をとっている。その場合にも格レベルの動静関係が異なる場合があることが観察される。

(７)(ａ)　車がトンネルから抜けた。
　　(ｂ)　日本列島が暴風域から抜けた。

(７)のペアは、述語に「抜けた」という同一の動詞を用い、格標示も＜ＸがＹから＞という同一のパタンをとっている。(7a)において、主格ＮＰ「車」が奪格(カラ格)ＮＰ「トンネル」の内側から外側へと移動変化をしており、「抜ける」という事象において、位置変化をしているのは主格ＮＰ「車」であり、奪格ＮＰ「トンネル」は位置変化を起こさない。(7a)において、変化するものが主格で標示されており、自動詞としてはノーマルな格標示である。一方、(7b)では、「抜ける」という事象にお

いて、移動するのは奪格ＮＰ「暴風域」であり、主格ＮＰ「日本列島」は移動することはない。つまり、動くものが奪格で標示され、動かないものが主格で標示されており、(7a)と格の動静関係が逆転している。ここでも(４)のペア同様、本来動くはずの「暴風域」の動きを静止させることで、静止しているはずの「日本列島」が移動しているように知覚され、主格で標示されているのであり、図地反転が成り立っている。

斜格が奪格で標示されている例をもう１つ挙げよう。

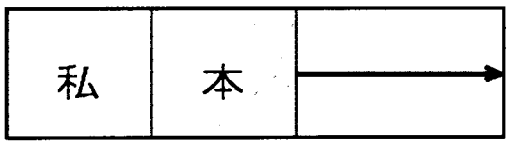
(８)(ａ)　太郎が駅から離れると、駅は暗くなった。
　　(ｂ)　手がボールから離れると、ボールは曲がり出した。

「太郎」が「駅」から物理的に移動して、「離れる」という変化を描くとき、(8a)の従節において、主格ＮＰに「太郎」が標示され、奪格ＮＰに「駅」が標示されている。移動変化をしている「太郎」が主格で標示され、変化のない「駅」が奪格で標示されており、ノーマルな格標示を受けた自動詞構文である。一方、「ボール」が物理的に移動し、つかんでいた「手」から遠ざかっていくことを描くとき、(8b)の従節において、移動変化をしている「ボール」が奪格で標示され、移動変化をしていない「手」が主格で標示されている。もちろん、「ボール」をつかんでいる指先が動くなど、主格の「手」に変化があることは否定できないが、奪格の「ボール」の移動変化と比較した場合、相対的に大きな変化をしているのは奪格の「ボール」と捉えるのが妥当であろう。相対的に変化の少ない「手」が主格で標示される一方で、相対的に変化の大きい「ボール」が奪格で標示されており、この範囲において、(8b)はノーマルな格標示を受けているとは言えない。しかし、(8b)は変化の大きい「ボール」の変化を静止させることで、変化の少ない「手」が動くように知覚されていると説明されるのであり、さらに、「手」は「ボール」から離れることで、つかんでる状態から開いている状態へと指先が動くなど、「離れる」とは違う変化をしているという点で成立条件①も保持されている。

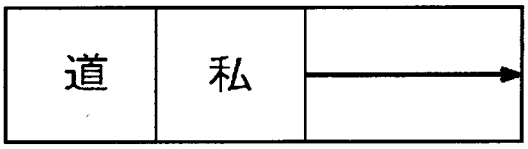
(９)のペアは他動詞構造の文であり、主格ＮＰと対格ＮＰの距離が離れていく様子を描いている。

(9)(a)　私が本を譲る。
　　(b)　私が道を譲る。

(9a)が描く事態は[図5a]が示しているとおり、「譲る」という事象において、「私」の所有物であった「本」が、誰かのところへ移っていく様子を描いている。(9a)では移動する「本」が対格で標示されており、移動しない「私」は主格で標示されているという点で、ノーマルな格標示の他動詞構文である。一方、(9b)が描く事態は、[図5b]が示しているとおり、「道」で「私」が自分のいる場所から移動して、他の人にその場所を通らせる事態を表している。移動しない「道」が対格で標示される一方で、移動している「私」が主格で標示されている。(9a)とまったく同一の格パタンを持っていながら、動静関係は反転している。ここにおいても、移動しているはずの「私」の動きを静止させることで、静止しているはずの「道」が動いているように知覚され、言語化されたのが(9b)である。



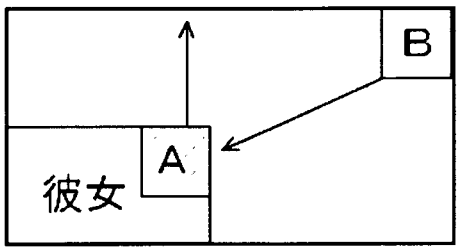
[図5a]本を譲る



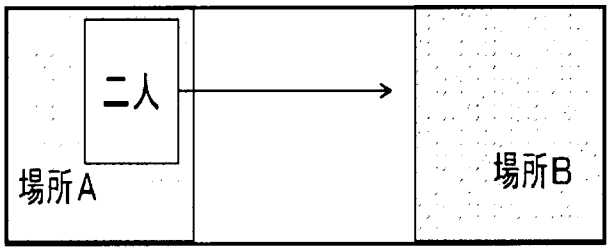
[図5b]道を譲る

(10)のペアは対格に標示されるものが他のものに、変わることを描いている。

(10)(a)　彼女が髪型をかえた。
　　(b)　二人が場所をかえた。



[図6a]髪型をかえる



[図6b]場所をかえる

[図6a]の「A」と「B」は髪型のタイプを表している。(10a)において、[図6a]が示すとおり、「彼女」の一部である「髪型」が「A」から、「B」へと変化しており、それを記号した(10a)は「彼女」を主格で標示し、「髪型」を対格で標示しており、ノーマルな格標示を受けている。一方、(10b)において、[図6b]が示すとおり、「二人」は「場所A」から「場所B」へと移動していることを描いている。この様子を記号した(10b)は、移動していない「場所」を対格で標示し、移動している「二人」を主格で標示している。(10b)においても、動いているはずの「二人」の移動を止めることで、静止している「場所」が移動しているように知覚され言語化されたのである。[10]

本節では＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】から図地反転の原理を援用することで理論的に格標示が交替することが、自動詞構造、他動詞構造を問わずに説明することができたと思われる。言語表現上の図地反転現象の成立条件①として＜結果として主格に別の種類の変化が生じるとき＞ということがあったが、考察対象を広げると、この成立条件①以外にも成立条件があると思われるが、その点については第3章で論じるつもりである。

第3節：まとめ

本章の議論を整理すると以下の2点に整理される。

[ｉ] 言語表現の中に動静関係の矛盾が含まれるとき、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】によって説明されるものがある。

[ii] [ｉ]の現象が起こるのは、基本的に＜主格に別の種類の変化が

生じるとき＞に限られる。

このことは自動詞構造の文にも、他動詞構造の文にも言える。ただ、考察対象を広げると[ⅱ]のほかに、別の条件が必要になる。この点については第３章で議論を行いたい。

注

[１]図地反転と言語表現上の動静関係については、菅井・黛(2005:63-67)で論じたが、本研究では、さらに詳細な分析を加えることになる。なお、図地反転と言語現象との関連については、山梨(1995:9-18, 2000:19-54, 2004a)、本多(2005:106-112)を参照されたい。

[２]「変化」には、位置変化と状態変化があり、位置変化は「入る」のように空間移動を表し、状態変化は「壊す」のように、そのものの形や性質が変化することを表す。

[３]「参与者(participant)」という概念は、通常、名詞句のうち主語や目的語のような主要なもの以外の名詞句を指すのに用いられるが、本研究では、主格や対格を含めたすべての名詞句を指すものとする。また、第３章で扱う名詞句として実現されない話者自身も参与者に含めて議論する。

[４]動詞について考えるとき、一般的に自動詞が対格をとらず、主格の動作が他におよばないものを指し、他動詞が対格をとり、主格の動作が他におよぶものを指す。本研究では、こうした動詞を最も自動詞らしい自動詞、最も他動詞らしい他動詞ということで、「典型的な自動詞」や「典型的な他動詞」という言葉を使っている。言い換えれば、これらは自動詞や他動詞のプロトタイプということになり、本研究では、プロトタイプの訳語として「典型」を使っている。プロトタイプとは、あるカテゴリー(ここでは自動詞、他動詞)の代表例のことを指し、当該カテゴリーの最もよい事例とされる。なお、自動詞と他動詞の問題については第５章で詳説する。

[５]国広(1982:97-142, 1997:175-206)、籾山(2001:30-32)おいて、多義語、同音異義語、単義語は連続的だと主張されている。また、池上(1975:124-125)、籾山(1992:186-187)、国広(1994:25-28)が単義説の問題点について述べているが、本研究では議論を複雑にすること

を避けるため、この問題には触れない。また、本研究において「多義」という言葉を用いることがあるが、国広(1982:97, 1997:175-176)で定義されるような厳密な意味で使っているわけではなく、単に、いくつかの意味に解釈できるという常識的な使い方であり、本研究での単義論的アプローチに矛盾するものではない。

[6]「トラック」が「駐車場」に止まっていない状態から止まっている状態になるという変化はあるが、「入る」という動詞が、直接表すことではない。ましてや、「駐車場」に厳密な意味ではタイヤの跡が付いたり、多少凹凸ができたりするということはあるだろうが、これらのことも「入る」が直接表すことではない。

[7]大堀(1992a:84)は「『図』と『地』の対立という認知図式はわれわれが対象を把握する際のボトムライン」であると、図地分化が基礎的な認知能力であることを述べている。また、大堀(1992b:38)は図地反転について「こうした認知図式は汎用性の高いものであり、言語構造のさまざまなレベルであらわれている。」としている。

[8]「ルビンの盃」のような図形を図地反転図形、または多義図形と呼ぶ。上村(1994:207)は図地反転図形を「見る人が意図的に一方の見え方だけをずっと維持することは難しい」としている。また、図地分化、図地反転については上村(1994)に記されているほか、辻(2002:127-128, 130、2003:13)、本多(2003:65-70)において言語学との関連で平明に解説されている。

[9]定延(1990:56)も、図地反転の有効性を否定しているわけではなく、Talmy(1975, 1978)の概念を引用し、「'Figure/Ground' は移動事象と存在事象の統一的把握にとって都合の良い概念と言えるが、移動事象に限って言えば、物理的動静関係以上の関係を表すのかどうか、はっきりしないようである」と、慎重な姿勢をとっていることは確認しておきたい。

[10]「場所をかえる」と言った場合、実際には移動先の「場所」は想定されないときもある。しかし、その場合でも起点である「場所」は変化することがないため、ここでの分析でカバーすることができる。

第２章　関連する諸問題

本章では、第１章の分析にかかわる諸問題を取り上げていく。第１節では用字法の問題、第２節では他動詞構造におけるノーマルな格標示と図地反転が作用している文の中間的な性質を持つ文について、第３節では図地反転が作用する際に、主格と与格の大きさが関係することを論じていく。

第１節：用字法による意味の差別化

ここまで、図地反転の原理を援用して、述語が同一で、格パタンも同じでありながら、格レベルの動静関係が異なる場合の分析を試みてきた。しかし、現代日本語においては、同様の現象を用字法によって意味分けしている場合がある。このことは、次の(１)のペアで具体的に確認できる。

(１)(ａ)　王様が争いを治(おさ)めた。
　　(ｂ)　王様が学問を修(おさ)めた。

(1a)において、主格ＮＰ「王様」が政治的手腕や武力によって、対格ＮＰ「争い」が起こっている状態から、静まった状態へとしたことを表している。主格ＮＰ「王様」が働きかけを行ったということは否定できないけれども、対格ＮＰ「争い」が起こっていたことから、治まったことへと変化をしたことに比べると、相対的に大きな変化を被っているのは、対格ＮＰ「争い」にほかならないという点でノーマルな格標示を受けた他動詞構文である。一方、(1b)において、主格ＮＰ「王様」は自分自身を高めるために日々努力をして、対格ＮＰ「学問」を学ぶことを表している。主格ＮＰ「王様」が知識を得たり、見識が深まるなどの内面的な変化が生じている反面、対格ＮＰ「学問」には何ら変化はない。(1b)は、他動詞構造の文であるにもかかわらず、対格ＮＰよりも主格ＮＰに大きな変化があり、ノーマルな格標示を受けているとは言えない。しかし、ここでも、第１章で詳説した【言語事象と知覚特性の互換性に関する仮説】を用いれば、通常、変化を被るはずの「王様」の動きを固定することで、静止しているはずの「学問」が動くように知覚され、(1b)のように記号されたと説明されるのであり、言語表現上の図地反転が起こって

いることが確認される。(１)のペアでも、第１章で取り上げた他動詞構造の例文のペアと同様の関係が観察されるが、現代日本語では(1a)の「治(おさ)める」と(1b)の「修(おさ)める」の関係のように用字法によって意味の差別化がされているものがある。

(１)のペアは主格ＮＰが同一であり、対格ＮＰは異なっていたが、(２)のペアは主格ＮＰと対格ＮＰに同一のものが置かれている。

(２)(ａ)　社長が会社を止(や)めた。
　　(ｂ)　社長が会社を辞(や)めた。

(2a)において、主格ＮＰ「社長」が、対格ＮＰ「会社」を今まで稼働していた状態から、閉鎖させるなど稼働しない状態へと変化させていることを表している。このとき、対格ＮＰ「会社」が主たる変化をしており、ノーマルな格標示を受けている他動詞構造の文である。それに対し、(2b)では、対格ＮＰ「会社」では人事異動などがあるにせよ、会社そのものに大きな変化は起こらない。一方、主格ＮＰ「社長」は、「社長」というポストから降り、今まで働いていた会社から去らなければならないなどの変化をしている。(2b)において、他動詞構造の文であるにもかかわらず、対格ＮＰよりも主格ＮＰのほうが相対的に大きな変化をしており、ノーマルな格標示を受けているとは言えない。しかし、この文も図地反転を援用すれば、通常、変化を被るはずの「社長」の動きを固定することで、静止しているはずの「会社」が動くように知覚されることで、「会社」が対格で標示され、「社長」が主格で標示されたと説明されるのである。(２)のペアは(１)のペアとは異なり、同一のＮＰを置きながら、述語に違う字があてられ、意味の差別化がされているものである。

図地反転の原理が、用字法によって意味の差別化がされていることが例外的ではないことは、(３)からも具体的に確認できる。

(３)(ａ)　太郎が花子を刺(さ)した。
　　(ｂ)　太郎が花子を指(さ)した。

(３)のペアもＮＰに同一のものが置かれている。(3a)において、主格ＮＰ「太郎」がナイフや包丁など凶器を使って、対格ＮＰ「花子」の体の

どこかを突くことで、「花子」は傷を受けたり、出血したりという被害を被る。主格ＮＰ「太郎」が凶器を使って、対格ＮＰ「花子」を傷つける行為をすることは否定できないけれども、主格ＮＰ「太郎」の行動と対格ＮＰ「花子」が受けた被害の大きさと比べた場合、相対的に大きな変化を被ったのは「花子」ととらえるのか妥当であろう。対格が主たる変化をしているという意味で、ノーマルな格標示を受けた他動詞文である。一方、(3b)において、主格ＮＰ「太郎」が指や棒などを、対格ＮＰ「花子」のほうへ向かって示すことを表している。主格ＮＰ「太郎」が対格ＮＰ「花子」を「指し」示しても、対格ＮＰ「花子」には影響がおよばない。むしろ主格ＮＰ「太郎」が腕を曲げたり、上下させたりするなどをしていて動きがある。現実には大きな動きをしている「太郎」の動きを止めることで、静止している「花子」を知覚したため、「花子」が影響を受けるなどの変化を被ったと知覚され、記号されたのが(3b)ということになる。ここでも、上述の(１)(２)同様、「刺す」と「指す」というように用字法で意味の差別化がされている。

現代日本語において、用字法による意味の差別化は一般的なことである。ただ、そこにも図地反転の原理が作用しているものがあることが、ここでは確認できたものと思われる。

第２節：中間的現象

第１章では、格標示の動静関係が通常と異なるケースについて【言語事象と知覚特性の互換性に関する仮説】として＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞を用いて説明するとともに、ここに成立条件①として＜結果として主格に別の種類の変化が生じるとき＞が課せられることを見た。ただし、このような反転現象には、中間的な段階が認められ、次のように例示される。

(４)(ａ)　社長が作業を止めた。
　　(ｂ)　社長が会社をやめた。
　　(ｃ)　社長が仕事を辞めた。

例文(４)において、下線部が変化を被る場合、(4a)の「やめた」には「止めた」、(4c)では「辞めた」の字があてられるとおり、前節で分析した

例文(２)と同じ説明がなされる。ところが、(4b)は「止める」と「辞める」のどちらの意味でも解釈することができ、この時点では、曖昧である。「止める」の字をあてればノーマルな格標示の文であり、「辞める」の字をあてれば主格が変化を被っており、図地反転の作用した文である。(4b)はノーマルな格標示を受けた文と、図地反転が作用した文の、どちらにも解釈できるという意味で、中間的な位置にある文である。[1]

(４)では用字法の違いの中で説明をしたが、次の(５)の場合は、用字法による使い分けはない。

(５)(ａ)　私が本を譲る。
　　(ｂ)　私が席を譲る。
　　(ｃ)　私が道を譲る。

(5a)において、主格ＮＰ「私」が対格ＮＰ「本」に働きかけることで、「本」が「私」から誰かのところへ移動することを表しており、ノーマルな格標示の文である。一方、(5c)においては、対格ＮＰ「道」が変化を被ることはなく、主格ＮＰ「私」が移動することを表しており、図地反転が作用した文である。(5b)においては、対格ＮＰ「席」が移動可能なパイプ椅子などの場合、主格ＮＰ「私」が「席」を移動させることができる。その場合はノーマルな格標示の文である。一方、「席」が、電車などの座席のように固定されたものであれば、主格ＮＰ「私」が動くことになり、図地反転が作用した文である。したがって、(5b)は(5a)と(5c)の中間的な位置にある文である。

ここまでの議論の中で他動詞構造の文では、主たる変化が起こるのが対格となるもの、図地反転が起こって主格となるもの、そして、どちらなのか曖昧で、中間的な位置にあるものが存在することが確認された。

さらに議論を進めるため、次の例文も見ていただきたい。

(６)(ａ)　インターネットの歴史を調べると、1969年にアメリカの４つの研究機関が、ARPANETと呼ばれる最初のインターネットを始めたと言われている。
　　(ｂ)　ついに、田舎の祖父がインターネットを始めた。

(6a)では、主格ＮＰ「研究期間」が対格ＮＰ「インターネット」のなかった状態から、作動する状態へと変化させたことを表している。したがって、対格ＮＰ「インターネット」に変化が生じており、ノーマルな格標示の文である。一方、(6b)は(6a)と同じ「始める」という述語を使っているにもかかわらず、現代社会において、対格ＮＰ「インターネット」は主格ＮＰ「田舎の祖父」が始めるまでもなく稼働している。ここでは主格ＮＰ「田舎の祖父」は、対格ＮＰ「インターネット」を使わない状態から使う状態になったという変化をしているのであり、「インターネット」は変化していない。このようなケースでも、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】を用いることで、(6b)の主格で標示された「田舎の祖父」の動きを止めることで、本来、静止してるはずの「インターネット」が動いているように知覚されたため、対格で標示されたと説明され、図地反転の原理が働いていることが確認できる。さらに言うべきは、(6b)において、実際に変化をしているのは主格ＮＰ「田舎の祖父」であり、成立条件①にあるように、主格ＮＰに述語で表すこととは別の変化が生じることで、主格ＮＰが特徴づけられているということである。ここでは、「田舎の祖父」がインターネットをすることで、「現代的なことにも積極的にチャレンジする」という特徴づけがなされるであろう。こうした特徴づけは、(3b)の「太郎」や、(2b)(4c)の「社長」、(5c)の「私」、には生じないという意味で(6b)の文は特徴的と言える。[2]

ここまでの議論を振り返り、他動詞構造の文において、主な変化がどこに生じるのかの違いについて整理すると、[図１]のようになる。ここで、[図１]について、簡単にコメントしておきたい。①の段階は他動詞構造の中でも、対格が主な変化を被り、ノーマルな格標示を受けた文である。本節では例文(4a)(5a)(6a)がそれにあたる。②は対格と主格どちらに主な変化があるか、曖昧な文で、中間的な位置にある文であり、例文(4b)(5b)がそれにあたる。③は図地反転が作用した文で、主格に主たる変化がある文であり、例文(4c)(5b)がそれにあたる。④は図地反転が起こることで主格に主たる変化が生じ、さらに、主格が特徴づけられる文であり、例文(6b)がそれにあたる。

① 主体が対象に働きかけることで、主たる変化が対象に起こる。
(ノーマルな格標示を受けている)
「ピンマイクを外す」「作業を止める」「本を譲る」
↓
② 主体が対象に働きかけることで、主たる変化が対象にあるのか、主体にあるのか判断できない。
「会社をやめる」「席を譲る」
↓
③ 主体が対象に働きかけることで、結果的に、主たる変化が主体に起こる。
(図地反転が作用した文)
「席を外す」　「仕事を辞める」「道を譲る」
↓
④主たる変化が主体に起こることで、主体が特徴づけられる。
「インターネットを始める」

［図１］他動詞構造文の主たる変化の位置

他動詞構造の文は、①②③④の順にプロトタイプから遠くなると言ってもよいだろうが、より重要なのは、①が成り立たなくても②が成り立てばよく、①も②も成り立たなくても③が成り立てばよいという定式化が成り立つことである。このことは、(7a)から(7d)を比較することで明確になる。

(７)(ａ)　太郎が花子を殺した。
(ｂ)　太郎が花子を見た。
(ｃ)　太郎が花子を待った。
(ｄ)　太郎が英語を忘れた。

(7a)は典型的な他動詞構造の文であり、［図４］で言えば①にあたることは明らかであろう。つまり、主格の「太郎」が対格の「花子」に働きかけることで、「花子」は「生きている状態」から「死んだ状態」へと決定的な変化を被っている。一方、(7d)においては対格ＮＰ「英語」が、主格ＮＰ「太郎」の働きかけによって変化するということはなく、「英語」を忘れてしまったことで、主格の「太郎」に内面的な変化があり、［図４］の③にあたる。このとき注意すべきは、「忘れる」という述語

において、①②の位置にあたる用法はないという点であり、このことから、①②が成り立たずとも③が成り立つということが分かる。一方、(7b)や(7c)においては［図５］の①とも③とも、はっきり断定できない。そういう意味で、他動詞構造の文は階層的にできあがっている。ただし、第１章で分析を試みてきたことは、同じ述語を使っているにもかかわらず、変化を被る位置が違っているという点で、図地反転による分析が有効であることが確認できたと思われる。[3]

第３節：主格と与格の大きさにかかわる問題

第１章の７ページにおいて、言語表現上の図地反転が生じるときの成立条件①として次のようなものを提示した。

成立条件①＝結果として主格に別の種類の変化が生じるとき

ところが、実際には成立条件①が存在するように見えるにもかかわらず、その表現が容認不可能な場合がある。具体的には次の例を比較することによって確認できる。

（８）　日本列島が暴風域に入った。

［＝４ページの例文(4b)］

（９）(ａ)　台風が日本列島に来た。

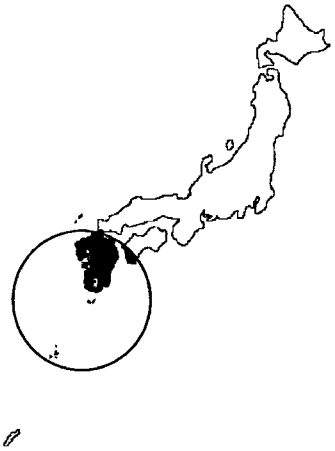
（ｂ）??日本列島が台風に来た。

(9a)において、現実には、主格ＮＰ「台風」が移動変化をしており、与格ＮＰ「日本列島」は位置変化を起こさない。主格ＮＰが与格ＮＰよりも相対的に大きな変化を被るという意味で、ノーマルな格標示を受けた自動詞構造をなしている。一方、(9b)を（８）とまったく同じように分析すれば、ここでも言語表現上の図地反転が成立しているかのように思われる。つまり、現実には移動している「台風」を静止させることで、静止している「日本列島」が動いているように知覚されたため、(9b)のように記号されたということになる。ところが、(9b)を容認することはできない。なぜ(9b)が容認不可能になるのだろうか。この問題を解決する

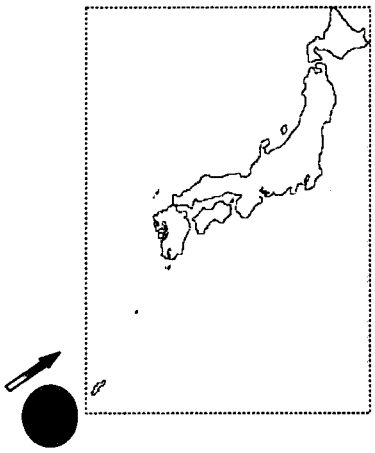
ために、(８)と(9a)の意味内容を分析したうえで、(9b)を検討し、容認不可能となる要因を探ってみる。

[図2a]における、左側の円で表した「暴風域」の重なって黒く塗りつぶされている「日本列島」の一部である九州地方が、「暴風域」に入っても、(８)の「日本列島が暴風域に入った」と言う。もし、この解釈が正しければ、(８)における「日本列島」は日本全体を指すのではなく、「日本列島の一部」ということになる。実際、暴風域が日本列島全体を覆うほど大きくなることはない。ここで確認したいのは、(８)における「日本列島」は九州地方のように「日本列島の一部」であって、「暴風域」より、物理的に小さい地域を指しているということである。

一方、[図2b]が示すように左側の円で示す「台風」が西側から「日本列島」に近づいた場合、(9a)のように「台風が日本列島に来た。」と言う。ここで表す「日本列島」とは(８)の日本列島とは異なり、[図2b]の破線で囲まれた部分のように「日本列島」全体を表しているのではないだろうか。もし、その解釈が正しければ、「日本列島」は「台風」よりも大きいということになる。



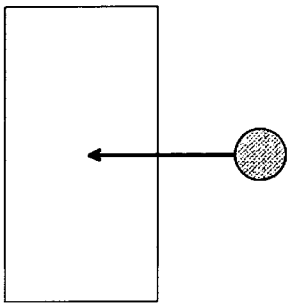
[図2a]暴風域に入る



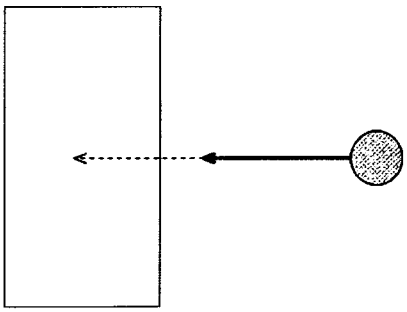
[図2b]台風が来る

もう少し、上述のことを明確にするために、「入る」と「来る」の意味内容の違いを明らかにしておく必要があるだろう。[図3a]は、「入る」の意味内容を分かりやすくするために図示したものであり、移動主体である右側の円が、左側の囲まれた空間(＝到着点)の内部に移動することを示していると理解されたい。一方、[図3b]は「来る」の意味を図示し

たものであるが、移動主体である右側の円が、左側の囲まれた空間に近づき寄っていることを示している。実際には近づくことだけではなく点線で記した矢印のように、「入る」と同じ様子を表すこともあるが、ここでは、実線の部分を表していると理解されたい。[4]



[図3a]「入る」の構造



[図3b]「来る」の構造

さて、(8)の場合、「暴風域」は「日本列島」と重なるわけだが、「暴風域」が「日本列島」の重なった部分と同じ形をしていることはなく、「暴風域」のほうが大きくなる。一方、(9a)における「台風」は「日本列島」の一部を覆うというよりは、[図2b]の破線部で示した「日本列島」そのものに近づき寄ってきていることを表しており、「日本列島」は「日本列島全体」を表している。このことをふまえると、(8)と(9a)における「日本列島」と「暴風域」および、「台風」の大きさの関係は次のように整理される。

台風　＜　日本列島　＜　暴風域

さて、移動主体が到着点に向かう際、どのような条件が必要なのであろうか。田窪(1984:91-92)は、場所のとらえ方について英語との比較の中で、日本語では「行く」ことのできるのは「場所」に限られると述べ、下のような例を挙げている。

(10)(a)　I went to the door.
　　(b)　* 私はドアに行った。
　　(c)　私はドアのところに行った。

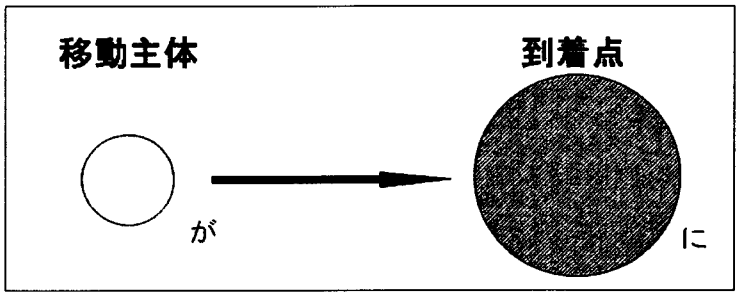
日本語では非場所の与格の「ドア」に「行く」ためには、非場所である「ドア」に「ところ」などの言葉を付けて場所にしなければならないということであり、「場所」と「非場所」は明確に区別されているというのである。つまり、「場所性」がないところには「行く」ことができないということになる。ところが、(11)のペアは与格に場所性がないにもかかわらず容認される。

(11)(a)　どうして私の手紙があなたに行くようになったか分からない。
　　(b)　小包が母に来た。

(11)のペアにおいて、移動主体の「手紙」や「小包」は到着点の「あなた」や「母」よりも相対的にサイズが小さい。ここから、移動主体が到着点よりも相対的に小さければ、「場所性」がなくとも容認されることが伺える。このことは、次の例によって、明らかであろう。

(12)(a) ?? 太郎が花に来る。
　　(b)　ミツバチが花に来る。

(12a)において、移動主体の「太郎」は到着点の「花」に比べて相対的に大きいのは明らかであろう。よって容認不可能となる。一方、(12b)において、移動主体の「ミツバチ」は到着点の「花」よりも相対的に小さく、この文は容認される。[5]



[図4]移動主体と到着点の相対性

以上から移動表現においては移動主体が到着点に比べて相対的に小さければ、到着点は「場所性」がなくとも単純な格標示で表すことができると言える。これを図示すると[図４]のようになる。ここで重要なのは、主格の移動主体が与格の到着点よりも相対的に小さければ言語化可能ということである。逆に到着点のほうが移動主体よりも小さいときは言語化ができない。[6]

このことをふまえて、もう一度(８)(9a)(9b)を見ていただきたい。上述したとおり(８)において、「日本列島」は「暴風域」よりも小さいし、(9a)において「台風」は「日本列島」よりも小さい。したがって、この２つの表現は問題なく容認することが可能である。ところが、(9b)において、(9a)同様「台風」は「日本列島」よりも小さい。したがって、主格で標示された「日本列島」が、与格で標示された「台風」に向かって、移動することはできない。このことから、次の例が説明可能になる。

(13)(ａ) ? 暴風域が日本列島に入った
　　(ｂ) ? 暴風域が日本列島に来た。
　　(ｃ) ?? 日本列島が暴風域に来た。

(13a)と(13b)は両方とも、「暴風域」が「日本列島」よりも大きいため、主格で標示された「暴風域」は、与格で標示された「日本列島」に向かって移動することはできない。一方、(13c)において、小さい「日本列島」が大きい「暴風域」に向かって移動するわけであるから、一見問題ないように見える。しかし、この文が容認不可能なのは、以下のような理由による。(13c)において、現実には動かない「日本列島」が主格で標示され、実際に移動する「暴風域」が与格で標示されており、自動詞構造としてはノーマルな格標示ではない。(13c)は、第１章で詳説した言語表現上の図地反転が起こるべき文であるが、「来る」ということだけでは「日本列島」に「台風」が影響を与えることはできず、主格の「日本列島」には述語とは別の変化が生じない。つまり、成立条件①を満たしていないため容認不可能なのである。[7]

本節では、成立条件①を満たしているにもかかわらず容認不可能な文について、主格と与格の相対的な大きさの関係で説明が可能であることを確認した。

第４節：まとめ

本章の議論は次のように整理される。

[ｉ]言語表現上の図地反転が作用した文には、用字法によって意味の差別化がされているものがある。

[ii]他動詞構造の文において、ノーマルな格標示と図地反転が作用した文の中間的な段階がある。

[iii]移動表現において、主格と与格の相対的な大きさが、文の容認にかかわり、その相対的な大きさが、図地反転現象に優先する。

本章の議論により、第１章で起こりうる諸問題が解決された。

注

[１]ここで言う「曖昧」とは、「漠然」のように解釈が成立しないということではなく、はっきりとした解釈が２つ以上あって決められないことを表している。

[２](1b)の「王様が学問を修めた。」の「王様」は、(6b)の「田舎の祖父」ほどに特徴づけられているかは判断しがたいが、「勤勉な王様」というような特徴づけはできるという点で(6b)と同様に扱ってもよいだろう。

[３]角田(1991:95)の二項述語の分類では、日本語において、「歩く」や「待つ」などのように他動性の低い動詞まで対格をとることが明らかにされている。

[４][図3a]の「入る」は国広(1997:182)に「『はいる』の現象素」として採用されていた図である。第４章の第１節の[図1a]も同様である。

[５]菅井(2000:16)は田窪(1984)の記述に対し、述語が求める移動主体が到着点よりも相対的に小さいという到着性【山梨(1994c:106-108)では「到達性」】〉を満たせば「場所性」がなくても単純な与格で容認できるとしている。なお、山梨(1994c:106-108)は格助詞「に」の用法について格助詞「へ」と比較したうえで〈収斂性〉〈到達性〉〈密着性〉〈近接性〉を挙げている。少なくとも、これらの用法で「へ」の用法と基本的に違うとする。ただし、これらの４つの概念

は山梨(1993, 1994a, 1994b)が、「ゆらぎ」という言葉を使っているように明確に分けられるわけではない。実際、菅井(2000:15)では、「この４つは独立した要因というより、いわば〈一本化〉という１つの軸の上で程度差をもった連続体として考える方が実態にあっている」と述べられている。

[６]移動主体に対して到着点の大きさがどのくらい大きければ容認されるかは文脈や認知主体によって左右されると思われるが、ここでは話題の中心ではないので検討をしない。

[７]「??日本列島が台風に入った。」は主格ＮＰと与格ＮＰの相対的な大きさの関係で、容認不可能なことが説明できるが、「?台風が日本列島に入った。」が容認しづらいことは説明できない。

第３章　現代日本語における動静関係の相対性について(２)

第３章では、言語表現上の図地反転が成立する条件として、第１章で議論してきた成立条件①とは異なる条件で成り立つケースがあることを議論していく。また、その成立条件は「概念化」という概念を援用することで、応用した形で成立する場合もあることを確認する。

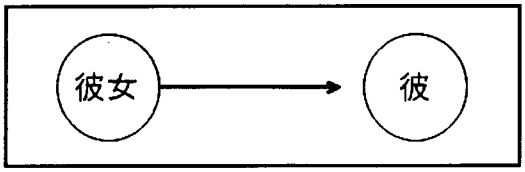
第１節：問題の所在

第１章において、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】から、図地反転の原理を援用することで、理論的に格成分の役割が交替することを論証してきた。そこで挙げられた例文の言語現象上の図地反転の成立条件①は、＜結果として主格に別の種類の変化が生じるとき＞ということであった。

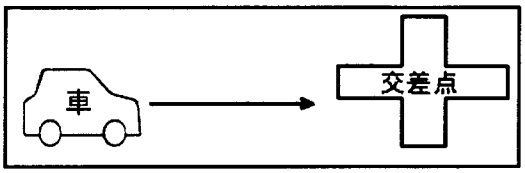
(１)のペアは、複文構造であるが、従節の主格に下線部が引かれており、その従節は自動詞構造である。もう一度、確認するが典型的な自動詞構造の場合、主たる変化は主格が被ることになる。第１章の分析方法にしたがっていけば、(1a)はノーマルな格標示を受けた文であり、(1b)は図地反転が作用した文である。ところが、図地反転を成立させるため

の、成立条件①は存在しないように思われる。

（１）（ａ）　暗闇の中で彼女が近づくと彼は驚いた。
　　（ｂ）　高架等が複雑に入り組んだ（案内等の）交差点が近づくと自動的に立体画像に切り替わります。



[図1a]彼女が近づく



[図1b]交差点が近づく

[図1a]は、左側の「彼女」が右側の「彼」のほうへ移動していく様子を描いている。一方、[図1b]は、左側の「車」が、右側の「交差点」に向かって移動していく様子を描いている。(1a)において、[図1a]が示すような状況を記号する場合、移動している「彼女」が主格で標示されており、ノーマルな格標示を受けた自動詞構文である。一方、(1b)において、[図1b]の様子を描いているにもかかわらず、移動していない「交差点」が主格で標示されている。自動詞構造の文では、主格ＮＰが変化を被るのがノーマルであるが、下線部の主格ＮＰ「交差点」は移動して近づいてくることはなく、「交差点」には「近づく」という事態において、変化が起こっているとは言えない。現実には、言語化されていない自動車（を運転しているドライバー）が移動してきて、「交差点」に近づいているのである。(1b)においても、第１章で論じてきた、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】を用いれば、図地反転が起こっていることが論理的に説明される。すなわち、動いているはずの「自動車」の動きを止めることで、動いていないはずの「交差点」が動いているように知覚されたため、「交差点」が主格で標示されていると説明されるのである。ところが、成立条件①として挙げた＜結果として主格に別の種類の変化が生じるとき＞という点は満たしていないように思われる。実際、「交差点」には、何ら変化はなく、先に挙げた成立条件①は成り立たない。それでは、成立条件①以外にも、成立条件があるのだろうか。第２節では、その点を探っていくつもりである。

第２節：話者と主格名詞における動静関係の相対性

本節では、第１節の問題提議をふまえ、言語表現上の図地反転現象が起こる際の成立条件①とは違う成立条件の存在を探る。(２)のペアは時間の流れの中で変化をしていく様子を描いている。

(２)(ａ)　最近、爆笑問題が面白くなってきた。
　　(ｂ)　最近、源氏物語が面白くなってきた。

(2a)の主格ＮＰ「爆笑問題」は２人組の漫才コンビであるが、(2a)は主格ＮＰ「爆笑問題」が面白くない芸をしていた状態から、稽古や日々の努力によって面白い芸をするように変化していって、「面白く」なったことを表している。(2a)において、主格ＮＰ「爆笑問題」が変化をしており、典型的な自動詞構造でノーマルな格標示の文である。一方、(2b)は山梨(2004b:15)で図地反転の例として挙げられている文であるが、具体的な分析はなされていない。しかし、この文も＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という本研究の【仮説】を時間変化の中で応用することにより、論理的に説明される。実際には「源氏物語」は、すでに1000年前に成立しており、今現在、変化していって「面白くなる」ということはない。(2a)が表していることは、「源氏物語」の読み手である表現者が勉強をしたり、年齢を重ねるなどして内面が変化し、「源氏物語」を面白く感じるようになったということである。すなわち、実際に変化しているのは主格ＮＰ「源氏物語」ではなく、「読み手の理解(ないしは解釈)」であるのに、それを静止させることで、実際には変化していない「源氏物語」が変化するように知覚されていると説明することができるのである。【言語事象と知覚特性の互換性に関する仮説】として挙げた＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞の１つ目の成立条件を７ページに挙げたが、ここでは、２番目の成立条件として次のことが言える。

成立条件②＝観察者の変化を固定すると静止している他者が変化するように知覚される

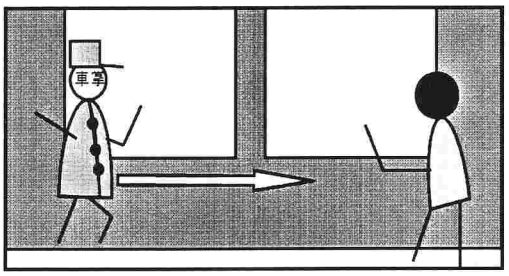
この成立条件②の「観察者の変化を固定すると」を他の言葉で言い換えると、「自分の変化は知覚されにくいので」ということになる。観察者とは表現者(＝話者)であり、事態をとらえるその人ということになる。現代日本語において観察者は、表現されることが少なく、言葉にあらわれにくい。(2b)について、もう一度確認しておくと、観察者である読み手の変化を固定することで、変化をしていない「源氏物語」が変化しているように知覚されたのである。[1]

さて、もう一度、例文(1b)に戻っていただきたい。(1b)においても、成立条件②が存在していることが理解できるだろう。すなわち、自動車を運転しているドライバー(＝観察者)が、実際には移動しているにもかかわらず、その観察者であるドライバーの動きを固定することで、実際には移動しないはずの主格ＮＰ「交差点」が、動いているように知覚されているのである。

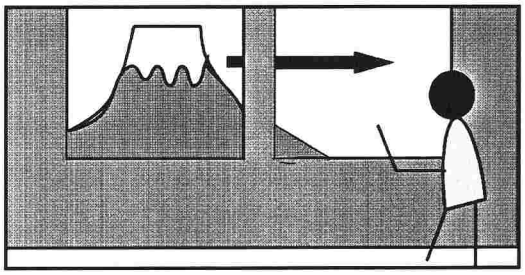
(３)のペアは、観察者の置かれている環境は、変わらないものの、観察者の対象への知覚の仕方の違いによって、格標示の動静関係が反転している例である。

(３)(ａ)　新幹線に乗っていると、あわてた車掌の姿が視界に飛び込んできた。

(ｂ)　新幹線に乗っていると、雪化粧した富士山が視界に飛び込んできた。



[図2a]



[図2b]

まず、[図2a]と[図2b]について、コメントしておきたい。[図2a]は、左側の人物の「車掌」が、新幹線の中で、右側の観察者のほうへ移動してきた様子を描いている。[図2b]は、走っている新幹線に乗っている観察者から見ると、窓の外にある「富士山」が、物理的には移動していない

にもかかわらず、左側から右側へと移動しているように見えることを描いている。(３)のペアのように、変化を表す自動詞構造において、主たる変化を被るのは(必然的に)主格ＮＰになることは自明のように思われる。実際、(3a)で位置的な変化を被っているものとして描かれているのは、[図1a]で示されるように、主格ＮＰの「車掌」であって、この限りにおいて格標示はノーマルなものと言っていい。これに対し、(3b)では、(3a)とまったく同じ述語動詞が用いられているにもかかわらず、主格ＮＰの「富士山」は物理的に移動変化を被ってはいない。むしろ、(3b)で物理的な移動変化を被っているのは新幹線であり、その中にいる観察者から見ると、[図2b]のように「富士山」が移動しているように見えるのであって、本質的には、新幹線に乗っている観察者が主たる位置変化を被っていることは明らかであろう。ここで重要なのは、「富士山」が何ら物理的に位置変化を被っていないにもかかわらず、(3a)と同じように、動詞「飛び込んでくる」を主要部とする動詞句の中で、「富士山」が主格で標示されているという点である。(3b)のような格標示は、一見、非論理的に見えるけれども、図地反転という概念を援用することで、はじめて理論的な説明を与えることが可能になる。すなわち、(3a)では、(新幹線の座席に置かれている)観察者の視点を固定することで、「車掌」が主たる位置変化を被るものとして記号され、主格で標示されているという点でノーマルな格標示であるのに対し、(3b)において、現実には観察者が新幹線に乗って移動しているにもかかかわらず、自らの移動状態を捨象して、主観的には静止しているという関係軸の中で「富士山」をとらえることで、物理的には静止しているはずの「富士山」が移動主体として主格で標示されたというものである。[2]

ここで作用している原理を、日常生活の中の知覚的な経験になぞらえて言えば、ホームに止まっている電車に乗って発車を待っていたとき、隣のホームに止まっている電車が俄かに動き始めると、隣の電車が動いたのに自分の電車が動き出したように錯覚することがある。このように、隣のホームにある電車の状態を動いていると情報処理できないとき(静止していると理解したとき)、本来は動いていないはずの自分の電車が動くように見えるという経験はよく知られているところであり、(3b)は、これと同じ原理が作用したというのが本研究の分析である。

ここまでの図地反転による分析と成立条件②によって、(４)から(６)

のような現象が説明できる。

(4)は時間が進むにつれて、事態が変化することを表している。

(4)(a)　年老いて、体が弱くなってきた

(b)　最近、メガネの度が弱くなってきた。

(4a)において、若いときは丈夫だった「体」が、年が経つにつれて衰えていって、以前ほど無理がきかなくなったことを表しているとき、「体」が主格で標示されており、ノーマルな格標示の自動詞文である。それに対し、(4b)において、勉強のしすぎなどで、以前に比べてものが見づらくなって、いつも使っているメガネでは見えなくなってきたことを描くとき、ここで変化しているのは「メガネの度」ではなく、メガネを使用している観察者(＝話者)ということになる。変化していない「メガネの度」が主格で標示されている一方で、変化している観察者は言語化されていない。ここでは、変化している観察者の変化を固定することで、変化していない「メガネの度」が変化しているように知覚されたために(4b)のように記号されたのである。

同様のことが次の例にもあてはまる。

(5)(a)　使っているうちに石けんが小さくなった。

(b)　洋服が小さくなった。

(5a)が描く事態は、「石けん」の使い始めたときの大きさから、日々使用するにつれて徐々に小さくなっていった結果である。これを記号した(5a)では、変化している「石けん」が主格で標示されており、自動詞構造としてはノーマルな格標示である。一方、(5b)は曖昧文(多義文)で、「洗濯して洋服が、縮んで小さくなった」という解釈も可能であるが、ここで問題にしたいのはもう一方の解釈、つまり、「自分自身が成長して、洋服が小さくなったように感じられる」という解釈である。こちらの意味の場合、現実的に成長して大きくなっているのは観察者であり、変化しているのは観察者である一方で、「洋服」は時間が経つにつれて小さくなっていくということはない。この事態を記号した(5b)において、主格で標示されているのは変化をしていない「洋服」であり、観察者は

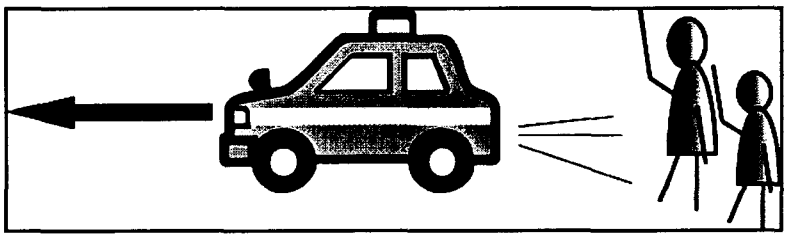
言語化されていない。ここにおいても、変化している観察者は自分の変化を意識せず、「洋服」を知覚したため、主格で「洋服」が標示されたのである。

(6)のペアは、空間を移動する現象である。

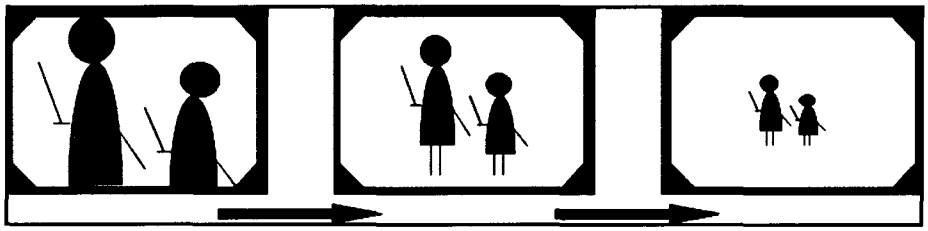
(6)(a)　電車が遠ざかっていくのを見送る私の脳裏には、いつまでも佐藤氏の温かい笑顔が浮かんでいた。

(b)　渡米の朝、玄関の前で家族全員が見送ってくれた。タクシーが走り出しても、しばらくは私の乗ったタクシーを見ていた。その姿が遠ざかっていくのを私もタクシーの中からじっと見ていた。

(6a)において、「電車」が駅で停車している状態から、ゆっくりと動き出し、段々と加速して離れていくという移動変化を描くとき、「遠ざかっていく」という事象において、主たる変化を被っているのは「電車」であり、その「電車」が主格で標示されることは、自動詞構造の文では、自明なことである。一方、(6b)において、客観的には、[図3a]が示すように、「タクシー」(の中にいる「私」)が移動していて、家族(=「その姿」)は停止している状況を記号したとき、「遠ざかっていく」という事象において、現実には移動していない「その姿」が主格で標示されている。ここにおいて、観察者は自分の動きを固定して「その姿」を[図3b]が示すようにとらえたため、「その姿」が動いているように知覚され、主格で標示されたのである。



[図3a]



[図3b]

(4a)(5a)(6a)においては、主格に主な変化があるノーマルな格標示をしている自動詞文であったが、(4b)(5b)(6b)においては、客観的な事実としては、主格には変化が生じない。しかし、そこでは言語表現上の図地反転が＜観察者の変化を固定すると静止している他者が変化するように知覚される＞という成立条件②が存在する形で、生じていることが確認できるであろう。しかも、時間の流れの中での変化でも、空間的な変化においても、成立条件②が成り立つことが確認できる。

ここまで見てきた(1b)(2b)(3b)(4b)(5b)(6b)の例はすべて、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】が、言語表現上の図地反転の分析に有効な作用をしている文である。ただ、第１章で分析した例文と違う点として、いずれも、＜観察者の変化を固定すると静止している他者が変化するように知覚される＞という成立条件②が存在しているのが理解できるであろう。

次のような例文は一見、成立条件②が存在せず、反例のように思われるが、実際にはどうであろうか。

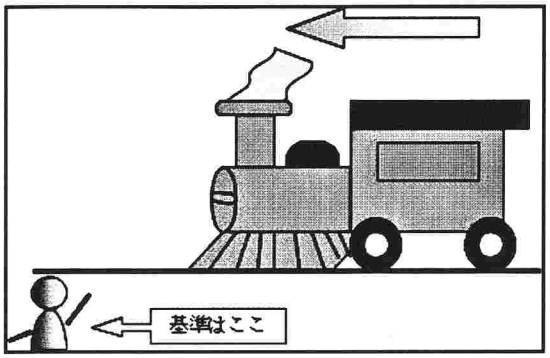
(７)(ａ)　カンカンと踏切の鐘が鳴り響き、遠くから大きな黒い蒸気機関車がせまっています。

(ｂ)　先頭の野口が最後のコーナーを周りました。いよいよゴールがせまっています。

(ｃ)　順天堂大学、また１校とらえて13位。その前には中央学院大学がせまっています。

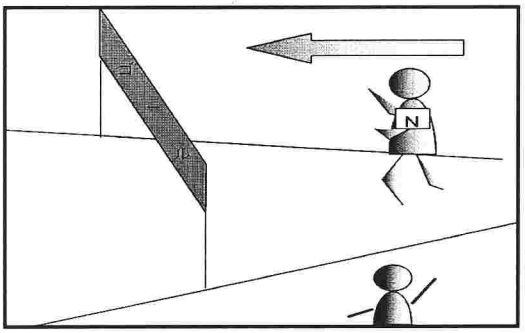
[図4a]は、左側にいる観察者に向かって、右側から「蒸気機関車」が移動して近づいていることを描いてる。(7a)が[図4a]の事態を記号するとき、「せまる」という事象において、移動している「蒸気機関車」が主

格で標示されており、ノーマルな格標示を受けた自動詞構文である。



[図4a]

[図4b]は、左側の静止している「ゴール」に向かって、右側の「N」が付された人物(=「野口」)が、矢印の方向に向かって進んでいる様子を描いている。(7b)において、[図4b]の状況を記号しているとき、「せまる」という事象において、現実には移動していない「ゴール」が主格で標示されている一方で、移動している「野口」は言語化されていない。ここでも、移動している「野口」の動きを静止させることで、静止している「ゴール」が移動しているように知覚されたと説明でき、(7b)は図地反転が作用した文と説明できる。

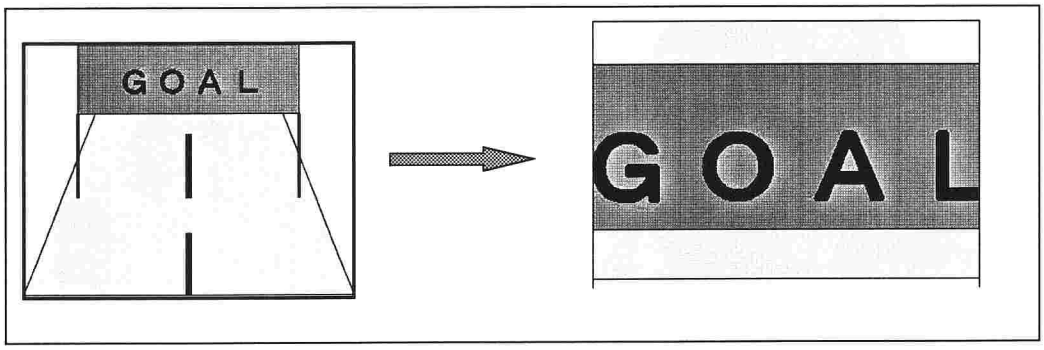


[図4b]

問題はこの文が今まで見てきた成立条件②を、単純に適用することができないということである。なぜなら、今までは観察者自身の変化を静止させることで、動いていないものが動いているように知覚されたのであるが、(7b)の場合はそうではないからである。言い換えれば、これまで

分析してきた例文は、基準となっているのが観察者自身であり、その基準である観察者の動きを止めることで、動いていない他者が動いているように知覚されたのである。ところが、ここでは観察者ではなく、観察者から観察されている一部の「野口」が基準になっているのである。動いている「野口」を基準として、静止させると、動いていないはずの「ゴール」が動いているように知覚されているのである。実際に言語化しているのは観察者であるが、その視点は観察者自身にあるのではなく、「野口」の視点にあるということになる。

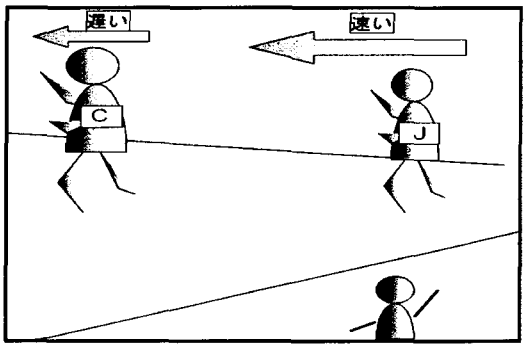
ここで導入すべき概念が「概念化」である。野村(2003:44)は、概念化とは、「単に概念内容だけでなく、その概念内容がどのような『立場』で捉えられているか＜中略＞を含むものである」とLangackerの立場を述べている。佐藤(1993:56[1985])は「別の視点に立ってみればどんなぐあいにものが見えるか、ということを思いえがいてみる能力」と同様のことを言っている。また、塩谷(2003:186)は「人に固有の経験的基盤や視点によって、現実世界の客観的な事態とは異なる姿で概念化することができる。」としている。ここでは成立条件②＜観察者の変化を固定すると静止している他者が変化するように知覚される＞の観察者が、その視点を他の地点に置くという概念化が行われていると説明できる。(7b)において観察者である概念化者は、観察点を「野口」に置いているのであり、概念化された野口の視点で見ると、「ゴール」は[図4c]のように目前にせまってくるように知覚されるのである。つまり、(7b)において、「概念化」を用いることで、成立条件②は成立しているのである。



[図4c]

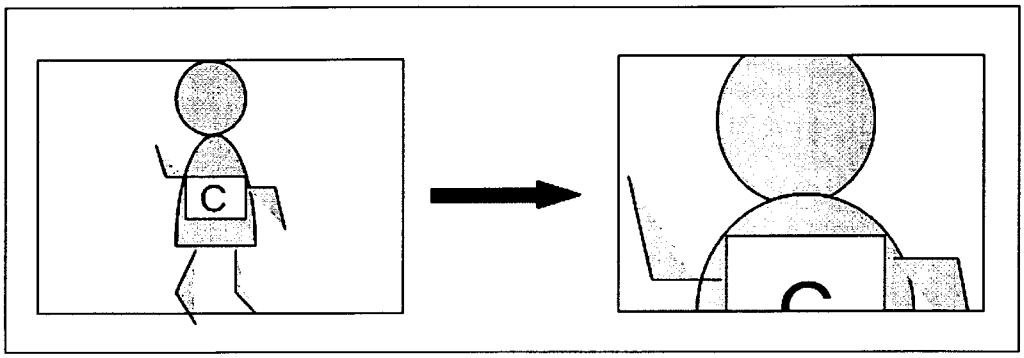
このことをふまえると、(7c)の分析が可能になる。まず、[図4d]につ

いてコメントしておくと、右側の「J」が付されている人物(=「順天堂大学」)と、左側の「C」の付されている選手(=「中央学院大学」)はどちらも同じ方向へと進んでいるが、「C」よりも「J」のほうが速く進んでいるため、「J」は「C」に近づいていっている状況を描いてると理解されたい。



[図4d]

(7c)において、[図4d]が示しているとおり、相対的に大きな移動をしているのは「順天堂大学」であって、「中央学院大学」ではないにもかかわらず、「中央学院大学」が主格で標示されている。つまり、動きの小さいものが主格で標示されているのである。ここでも、相対的に動きの大きい「順天堂大学」を静止させることで、[図4e]が示すように、動きの小さい「中央学院大学」が「順天堂大学」の視点から見ると後方に移動してくるように知覚されているため、(7c)のように記号されたのである。つまり、観察者は「順天堂大学」に視点を置くという概念化をしている。(7b)において、実際に動いている「野口」の視点から静止している「ゴール」を観察していたが、(7c)においては、相対的に動きの大きい「順天堂大学」の視点から相対的に動きの小さい「中央学院大学」を観察している。



[図4e]

(7)の例文で概念化という理論を用い、観察者(＝話者)の視点を観察しているものの一部に置くことで成立条件②が成り立ち、言語表現上の図地反転が成り立つことが確認された。

さて、ここまで挙げてきた例文はすべて述語に動詞が置かれている文であったが、実際には名詞文や形容詞文についても、図地反転が作用した文がある。名詞文も形容詞文も対格をとらない。したがって、自動詞構造の文であり、ノーマルな格標示を受けていれば主格が変化を被ることになる。[3]

名詞文でありながら図地反転が生じていることは、次の例で具体的に確認できる。

(8)(a)　破壊されたバーミヤンの大仏が人類の宝だった。
　　(b)　このおもちゃが子どもの頃は宝だった。

(8a)において、主格ＮＰ「バーミヤンの大仏」が存在していたときは「宝」であったが、今となっては破壊されてしまい、存在しなくなってしまったことを表している。存在していたことから、破壊されてなくなってしまったという変化をしている「バーミヤンの大仏」が、主格で標示されており、ノーマルな格標示を受けた自動詞構造の文である。一方、(8b)において、「このおもちゃ」は現在も「子どもの頃」も存在しており、その意味で「おもちゃ」自体に変化はない。ここでは、「おもちゃ」の持ち主である観察者自身が成長し、「おもちゃ」を以前は「宝」と感

じていたのに、今では「宝」と感じなくなってしまったということを表しているのであり、変化をしているのは観察者ということになる。現実には変化している観察者の変化を静止させることで、「おもちゃ」が変化しているように知覚されて言語化されたため、「おもちゃ」が主格で標示されているのであり、成立条件②のもと、言語表現上の図地反転が成立している。

同様のことは形容詞文にも言える。言うまでもなく、形容詞は状態や性質を表す品詞であり、変化という面を中心にして論ずることは難しいが、主格の状態を表しているというという意味では自動詞構造と言えるだろう。

(9)(a)　日本の生活に比べてアメリカでの生活が長かった。
　　(b)　今考えると、子どもの頃は1日が長かった。

例文(9a)において、主格NP「アメリカでの生活」が「日本の生活」と比較した場合、相対的に「長かった」のであり、述語の「長い」は主格の状態を表しており、ノーマルな格標示を受けている。一方、(9b)において、客観的には、「今」の「1日」と「子どもの頃」の「1日」の長さが違うことはあり得ない。現実には、観察者自身が子どもの頃感じた「1日」の長さと、今感じる「1日」の長さが違うのである。ここで変化しているのは観察者の時間の感じ方であり、観察者自身が変化したのである。それを記号した(9b)では、実際に変化していない「1日」が主格で標示されており、ノーマルな格標示とは言えない。しかし、観察者を静止させることで、「1日」が変化しているように知覚されているのであり、それが言語化されたのが(9b)ということになる。

言語表現上の図地反転が、述語を動詞に持つものだけでなく、述語が名詞や形容詞でも成立条件②のもと作用することが確認された。

第3節：まとめ

本章の議論を整理すると以下の2点に整理される。

[i]言語表現上の図地反転が生じるときの成立条件として、第1章で論じた成立条件①＜主格に別の種類の変化が生じるとき＞のほか

に、成立条件②＜観察者の変化を固定して、静止している他者を知覚するとき＞がある。

[ⅱ]成立条件②は、観察者が視点を他の地点に置くという概念化を行うことで成り立つ場合がある。この成立条件において、話者が観察者と一致しなければならない。

[ⅰ]の２つの成立条件は【言語事象と知覚特性の互換性に関する仮説】＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞を支えるものということになる。また、言語表現上の図地反転が成立条件②のもとで成立するとき、述語が名詞、形容詞の場合がある。

言語表現上の図地反転について、第１章と第３章と論じてきたが、図地反転が知覚の原理であることを考えると、言語と知覚に同じ原理が働いているわけだから、言語能力と他の認知能力が関連していることが示されたと思われる。ここまでの分析結果をふまえ、第４章では言語能力と他の認知能力が関連していることをより明らかにするため、図地反転を用いて多義構造が対義関係にあるものを分析していくことになる。

注

[１]山梨(2004b:15)は「例の数学の問題がやさしくなってきた」という例文も挙げているが、この文も本研究の分析方法で説明できることは明らかであろう。

[２]「新幹線に乗っていると、一人の大男が視界に飛び込んできた。」は、主格ＮＰ「一人の男」が観察者から見えないところから移動してきて、見えるようになったのであれば典型的な自動詞構造の文であり、観察者が本を読んでいるなどした状態から顔を上げて「一人の大男」を見たとしたら、図地反転が作用した文と言える。そういう意味で第２章の第２節で取り上げた「中間的な位置」にある文である。この文は自動詞構造であり、中間的な位置にある文が他動詞構造の文だけでなく、自動詞構造の文にも存在することが確認できる。

[３]形容詞文・名詞文の定義は仁田(1993:21)にしたがった。形容詞文については「～を欲しい」のように対格をとる場合があるが、形容

詞の一般的な用法とは言えないだろう。また、角田(1991:69)では他動詞文でないものはすべて自動詞文と扱っており、本研究での扱いと一致する。

第４章　言語表現における図地反転とスキーマ分析の複合モデル

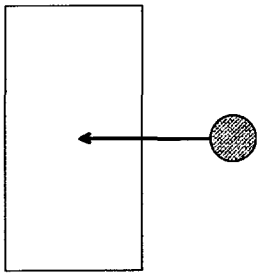
第４章では、第１章と第３章での分析をふまえ、スキーマ分析によって多義構造分析をするうえで、図地反転の原理を援用することによって説明が可能になる事例を取り上げる。具体的に取り上げるのは、動詞「失う」と「奪う」の多義現象である。

第１節：問題の所在

第１章や第３章で分析を行ってきた例文の述語には、多義性に類義関係が認められた。例文(１)で確認してみよう。

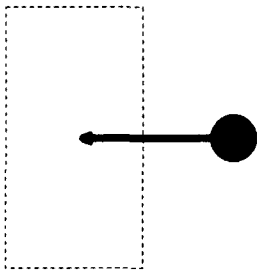
(１)(ａ)　トラックが駐車場に入った。
　　(ｂ)　日本列島が暴風域に入った。

[図1a]は国広(1997:182)に採用されていた図であるが、例文(１)の多義性は、このようなイメージスキーマで説明が可能になる。イメージスキーマとは、具体例に共通した部分だけを抽出した抽象的なイメージであり、経験を一般化、抽象化して記憶された知識の鋳形である。[図1a]は、移動主体である右側の円が、左側の囲まれた空間(平面あるいは立体)の内部に移動することを示している。[1]

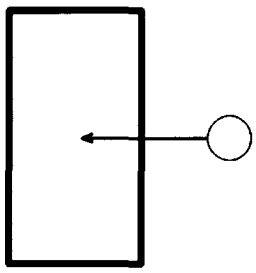


[図1a]入る

(1a)において、移動主体が主格ＮＰ「トラック」となり、囲まれた空間が与格ＮＰ「駐車場」となる。(1a)は自動詞構造でノーマルな格標示を受けているので、主格で標示されている「トラック」が移動変化をしているのであり、プロファイルされている。[図1a]から、(1a)の意味を説明するために必要なプロファイルを与えたものが[図1b]であり、図の中で「●」や「←」のように太くなった部分をプロファイルされた部分としている。[2]



[図1b]車が入る



[図1c]日本列島が入る

[図1b]は移動主体である「トラック」が移動先である囲まれた空間の「駐車場」に移動しているという関係を描いている。特に「トラック」が移動していることがプロファイルされている点で特徴づけられる。

一方、(1b)において、移動主体が与格ＮＰ「暴風域」となり、囲まれた空間が主格ＮＰ「日本列島」ということになる。(1b)は自動詞構造であるが、与格の「暴風域」が移動変化をしており、ノーマルな格標示とは言えず、プロファイルされているのは主格で標示されている「日本列島」である。[図1a]から、(1b)の意味を説明するために必要なプロファイルを与えたものが[図1c]である。[図1c]は移動主体である「暴風域」が、移動先の囲まれた空間である「日本列島」に移動している関係を描いている。特に「日本列島」の状態の変化がプロファイルされている点で特徴づけられる。

上記の分析をふまえ、[図1b]と[図1c]を比べていただきたい。ここで明らかなのは、(１)のペアのように類義関係の多義性は、プロファイルの違いに帰着することができるということである。

ところが、次の例文の関係のように、多義性に対義的な関係が見られ

るものがあるが、こうしたものはプロファイルの違いだけでは、説明が不可能である。

(2)(a)　事業に失敗し、ほとんどの財産を失った。
　(b)　頭を強く打って一時的に記憶を失った。
　(c)　5対1でリードしていたが、ホームランで2点を失った。

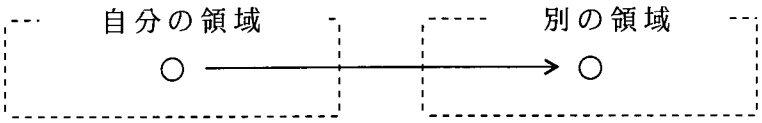
(2a)と(2b)は、それぞれ対格の「財産」と「記憶」が所有者以外のところに移動することを表している。一方、(2c)では対格の「2点」は所有者から移動することはないだけでなく、相手に「2点」が加わっている点で、(2a)や(2b)と大きく異なる。

ここにある「失う」の多義構造はスキーマ分析だけでは解決することができない。そこで、前章までの分析で援用してきた図地反転の原理を複合させることで説明が可能になることを確認していく。

第2節：図地反転に基づく多義分析(1)－「失う」の場合－

あらためて、例文(2)を見ると、(2a)の場合、およそ「初期の状態で＜自分の領域＞にあった「財産」が、＜別の領域＞に移動することによって、結果的に、＜自分の領域＞に存在しない状態ができる」と記述できる。(2b)の「失う」は、初期の状態で＜自分の領域＞にあった「記憶」が、＜別の領域＞に移動するという点では(2a)と変わりないが、(2a)との相違点として、どこか特定の領域に移動するということはなく、むしろ、＜自分の領域＞に存在しない状態になることにフォーカスが置かれる。一方、(2c)の「失う」は、(2a)や(2b)と大きく異なり、「5対1」でリードしている状態で、「2点を失う」ことがあっても、＜自分の領域＞にある5点から2点が減じられて「3点」になるということはない。実際、「5対1」でリードしている状態で、2点を失えば、スコアは「3対1」にはならず、敵方(相手チーム)に「2点」が「加えられる」ことで、「5対3」の状態になる。[3]

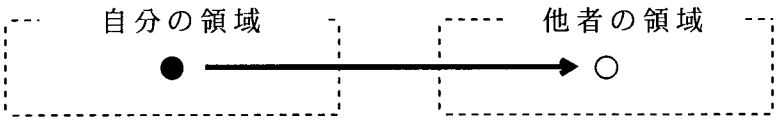
そこで、(2c)のような、やや特異な意味用法を含めて「失う」の意味を統一的に分析するため、本研究では、[図2]のようなイメージスキーマを導入する。



［図２］　動詞「失う」の基本スキーマ

この［図２］では、＜自分の領域＞と＜別の領域＞という２つの領域が設定され、初期状態に、「○」で表示された対格ＮＰが＜自分の領域＞にあり、それが＜別の領域＞に移動することによって、最終的に、＜自分の領域＞に存在しない状態ができるという関係を描いているものと理解されたい。専門的に言えば、この［図２］は、ベース(base)だけが表示され、特定の部分にプロファイルが与えられていない状態になっている。なお、＜自分の領域＞と＜別の領域＞の部分はスロットであり、具体的な事例の中で特定されるため、各例文を説明する際に変更されることになる。[4]

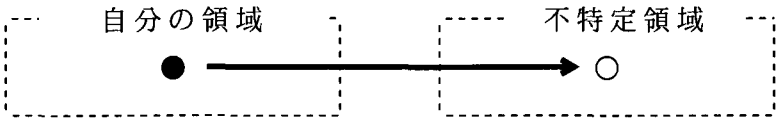
［図２］から、(2a)の意味を説明するために必要なプロファイルを与えたものが下記の［図３］である。



［図３］　「財産を失う」

［図２］の関係を上述の用例(2a)に適応すれば、「初期の状態で＜自分の領域＞にあった「財産」が、＜別の領域＞に移動することによって、結果的に、＜自分の領域＞に存在しない状態ができる」という関係を描いていると理解されたい。特に、＜自分の領域＞から外に出ていくことをプロファイルすることで、特徴づけられる。(2a)において対格ＮＰの「財産」は、＜自分の領域＞に所在しない状態になるが、その結果、自分以外の他者の所有物となる。むしろ、(2a)のような意味の場合、移動先は自分以外の他者なのが通常であるから、［図２］で＜別の領域＞とされた部分は、［図３］では＜他者の領域＞とするのが適当であろう。

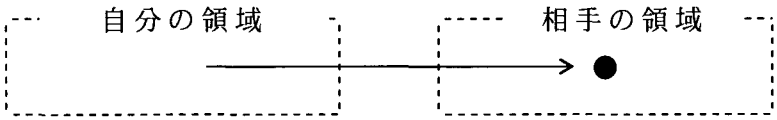
次に、(2b)における「失う」の意味を［図２］で説明しようとすれば、次の［図４］のように示すことができる。



［図４］　「記憶を失う」

(2b)において対格ＮＰの「記憶」は、＜自分の領域＞に所在しない状態になるが、その結果、どこに移動したかは特定されていない。むしろ、(2b)のような意味の場合、移動した結果は不特定なのが通常であるから、[図２]で＜別の領域＞とされた部分は、[図４]では＜不特定領域＞とするのが適当であろう。このとき、＜他者の領域＞と＜不特定領域＞とは、決して大きく異なるものではないことから、それぞれ[図３]と[図４]で表される(2a)と(2b)の「失う」は、大きな違いではないことが伺われよう。

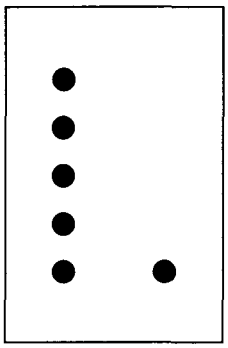
問題は(2c)の「失う」である。(2c)の例において、(2a)や(2b)と同じメカニズムが働いたように解釈すれば、「５対１」の５点から２点減じられて３点になる。しかし、実際には「５対１」でリードしている状態で、「２点を失った」とき、当初「５点」だった自分のチームの得点から２点減じられて「３点」になることはない。(2c)に関して最も特異なのは、「失う」という事象を通して「５」が「３」になることがない一方で、当初「１点」しかなかった相手チームの得点が「３点」に増えるところにある。この関係を[図２]のイメージスキーマに反映させると、次のように図示できる。



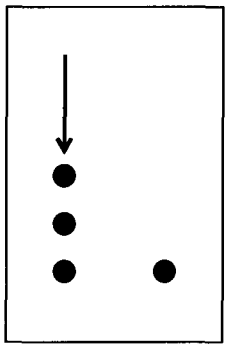
［図５］　「２点を失う」

[図５]では、当初＜自分の領域＞にあった得点は何ら減じられることはなく、＜他者の領域＞に「１」から「３」への増加が起こるという変化が描かれている。このとき、得点が増加する右側の領域は、明らかに特定されていることから＜相手の領域＞でよいことになる。

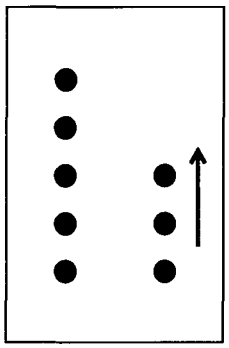
ここで注意すべきは、(2c)のような「２点を失う」という言語表現の成立に対し、この[図５]だけでは最終的な説明を与えることはできないという点である。この関係を引き起こす必須の動機づけとして作用するのが、第１章、第３章で詳説した図地反転の原理である。この原理の発動を視覚的に説明するために、次の[図6a]～[図6c]を導入する。



[図6a]５対１



[図6b]３対１



[図6c]５対３

[図6a]から[図6c]の「●」の数は、点数を表し、[図6b]と[図6c]の「↓」「↑」は[図6a]から変化した部分を示している。[図6a]は(2c)における「２点を失う」前の状態である。(2c)の「失う」の意味を(2a)や(2b)と同じように解釈すれば、[図6b]が描くように、「５点」から「２点」が減じられて「３点」になるということになるが、すでに確認したように(2c)の意味はそうではない。実際には、[図6c]が描くように、自分のチームの「５点」に変化はなく、相手チームの「１点」に「２点」が加えられて、結果的に「５対３」になるというものであった。このとき、(2c)の意味が生じるのに、図地反転の原理が作用していることは明らかであろう。すなわち、自分のチームの点数が変化するところで、その変化を止めることで、本来なら変化の起きないはずの相手チームの得点が、増加するように見えるというものである。

上述の考察から分かることとして、(2a)と(2b)の差異は、[図３][図４]のような「失う」のベースに対するプロファイルの違いに帰着できるが、(2c)の用法は、プロファイルの違いに、図地反転の原理が作用しなければ生じないということである。

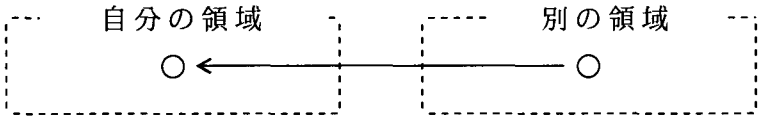
第３節：図地反転に基づく多義分析(２)－「奪う」の場合－

第２節で「失う」の多義構造の対義的な関係を見てきたが、次は「奪う」の多義構造を見ていこう。「奪う」にも「失う」同様、多義に対義的な関係が観察されることは、次の例文(３)から具体的に確認される。

(３)(ａ)　強盗団は３億円を奪い、逃走した。
　　(ｂ)　美浜３号機事故は四名もの生命を奪い、悲しみばかりが残った。
　　(ｃ)　１対５で負けていたが、ホームランで２点を奪い、３対５になった。

例文(３)における３種類の「奪う」の意味の差異に簡単にコメントしておく。(3a)は初期の状態で＜別の領域＞にあった「３億円」が、＜自分の領域＞に移動することによって、結果的に＜別の領域＞に存在しない状態になることを示している。(3b)の「奪う」は＜別の領域＞にあった「命」が＜別の領域＞から移動するという点では、(3a)と変わりないが、(3a)との相違点として、＜自分の領域＞に移動するということはなく、むしろ＜別の領域＞に存在しなくなることにフォーカスが置かれる。一方、(3c)の「奪う」は(3a)や(3b)と大きく異なり「１対５」で負けている状態で「２点を奪う」ことがあっても、相手チームの５点から２点が減じられて「３点」になるということはない。実際、「１対５」で負けている状態で、２点を奪えば、スコアは「１対３」にはならず、自分のチームに「２点」が「加わる」ことで「３対５」になる。

そこで、例文(２)の「失う」同様、「奪う」の意味を統一的に分析するために、下記の[図７]のようなイメージスキーマを導入する。

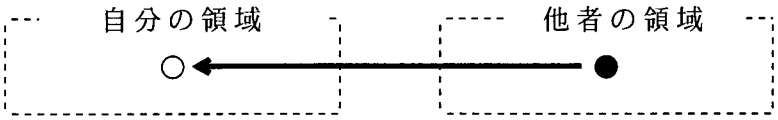


[図７]　動詞「奪う」の基本スキーマ

この[図７]では、＜自分の領域＞と＜別の領域＞という２つの領域が設定され、初期状態に、「○」で表示された対格ＮＰが＜別の領域＞にあ

り、それが＜自分の領域＞に移動することによって、最終的に、＜別の領域＞に存在しない状態ができるという関係を描いているものと理解されたい。この[図７]は、[図２]同様、ベース(base)だけが表示され、特定の部分にプロファイルが与えられていない状態になっている。「失う」の場合と同様に、＜自分の領域＞と＜別の領域＞の部分はスロットであり、具体的な事例の中で特定されるため、各例文を説明する際に変更されることになる。ここでは暫定的にデフォルト値として＜自分の領域＞と＜別の領域＞を置いている。

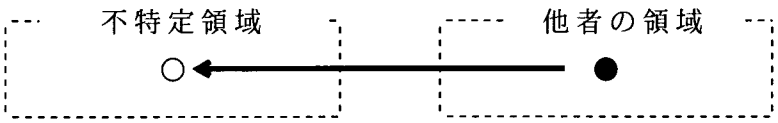
[図７]から、(3a)の意味を説明するために必要なプロファイルを与えたものが下記の[図８]である。



[図８]　「３億円を奪う」

[図７]の関係を上述の用例(3a)に適応すれば、「初期の状態で＜別の領域＞にあった「財産」が、＜自分の領域＞に移動することによって、結果的に、＜別の領域＞に存在しない状態ができる」という関係を描いていると理解されたい。特に、＜別の領域＞から外に出ていくことをプロファイルすることで、特徴づけられる。(3a)において、対格ＮＰの「３億円」は、＜別の領域＞に所在しない状態になるが、その結果、自分の所有物となる。むしろ、(3a)のような意味の場合、「奪う」ことが行われる前に存在した場所は、他者なのが通常であるから、[図７]で＜別の領域＞とされた部分は、[図８]では＜他者の領域＞とするのが適当であろう。

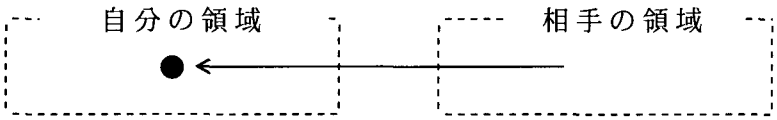
次に、(3b)における「奪う」の意味を[図７]で説明しようとすれば、[図９]のように示すことができる。



[図９]　「命を奪う」

(3b)において、対格ＮＰの「命」は、＜別の領域＞に所在しない状態になるが、その結果、どこに移動したかは特定されていない。むしろ、(3b)のような意味の場合、移動した結果は不特定なのが通常であるから、[図７]で＜自分の領域＞とされた部分は、[図９]では＜不特定領域＞とするのが適当であろう。このとき、＜自分の領域＞と＜不特定領域＞とは、決して大きく異なるものではないことから、それぞれ[図８]と[図９]で表される(3a)と(3b)の「奪う」は、大きな違いではないことが伺われよう。

問題は(3c)の「奪う」である。(3c)の例において、(3a)や(3b)と同じメカニズムが働いたように解釈すれば「１対５」の５点から２点減じられて３点になる。しかし、実際には(3c)の例において、「１対５」で負けている状態で、「２点を奪った」とき、当初「５点」だった相手の得点が２点減って「３点」になることはない。(3c)に関して最も特異なのは、「奪う」という事象を通して「５」が「３」になることがない一方で、当初「１点」しかなかった自分のチームの得点が「３」に増えるところにある。この関係をスキーマに反映させると、次のように図示できる。

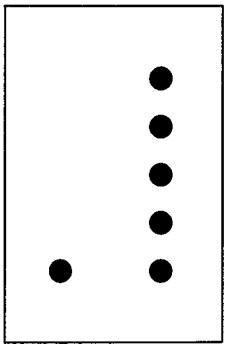


[図10]　「２点を奪う」

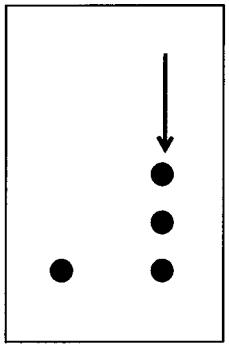
[図10]では、当初＜別の領域＞にあった得点は、何ら減じられることはなく、＜自分の領域＞の「１点」が「３点」へ増加するという変化が描かれている。このとき、得点が変化しない右側の領域は、明らかに特定されていることから＜相手の領域＞でよいことになる。

ここで注意すべきは、(3c)のような「２点を奪う」という言語表現の成立に対し、この[図10]だけでは最終的な説明を与えることはできないという点である。この関係を引き起こす必須の動機づけとして作用するのが「失う」の分析でも用いた図地反転の原理である。この原理の発動を視覚的に説明するために、次の[図11a]～[図11c]を導入する。[図11a]

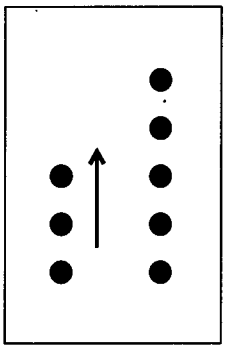
から[図11c]の「●」の数は点数を表し、[図11b]と[図11c]の「↓」「↑」は[図11a]から変化した部分を示している。



[図11a]1対5



[図11b]1対3



[図11c]3対5

[図11a]は、(3c)において「2点を奪う」前の状態である。(3c)「奪う」の意味を(3a)や(3b)と同じように解釈すれば、[図11b]が描くように、「5点」から「2点」が減じられて「3点」になるということになるが、すでに確認したように(3c)の意味はそうではない。実際には、[図11c]が描くように、相手のチームの「5点」に変化はなく、自分のチームの「1点」に「2点」が加えられて、結果的に「3対5」になるというものであった。このとき、(3c)の意味が生じるのに、図地反転の原理が作用していることは明らかであろう。すなわち、相手のチームの点数が変化するところで、その変化を止めることで、本来なら変化の起きないはずの自分のチームの得点が増加するように見えるというものである。さらに、上述の考察から分かることとして、(3a)と(3b)の差異は、[図8][図9]のような「奪う」のベースに対するプロファイルの違いに帰着できるが、(3c)の用法は、プロファイルの違いに、図地反転の原理が作用しなければ生じないということである。

付け加えれば、(2c)(3c)の描く事象は仮現的(apparent)ではなく、(2c)(3c)の意味で慣習化されており、この点で、第1章、第2章で分析してきた図地反転が作用した文とは異なるということになる。

第4節：関連する諸問題

第2節において、「失う」に対義的な関係があることを指摘した中で

例文(2c)として挙げた「５対１でリードしていたが、ホームランで２点を失った。」の「失う」は当初＜自分の領域＞にあった得点は何ら減じられることはなく、＜他者の領域＞に「１」から「３」への増加が起こるという変化が描かれていると分析をした。この分析に対して次のような分析が成り立つように感じられるかもしれない。

「５対１」で４点リードしている、その４点の「リード」のうちの２点を失った。

この分析にしたがえば、＜自分の領域＞にあるリードが＜他者の領域＞に移ると分析でき、イメージスキーマのプロファイルの違いで説明が可能なようである。さらに図地反転の原理を使うことなく単純に説明され、一見正しいように感じられるかもしれない。しかし、この分析は、次の２点において明確に否定されなければならない。

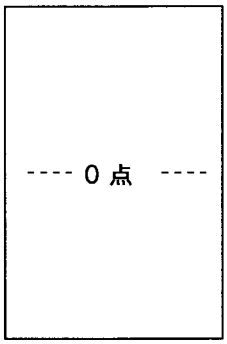
１点目は、この主張を認めてしまえば「２点を失う」ことによって、［図6b］で示した状態、つまり、「３対１」の状態になることを容認することになる。「リード」は自分のチームが持っているのであり、その「リード」か失われれば、自分のチームの５点から２点が減じられて３点になるということになる。(2c)の「失う」は本来、失われるはずの＜自分の領域＞にある点数が減ることがなく、＜相手の領域＞に点数が加わるところが、(2a)(2b)の「失う」と違うのであり、そこに図地反転が作用しているのである。実際(2c)の「失う」が作用したことによって自分のチームの得点は減らないにもかかわらず、相手チームに得点が加わることから「リードが失われる」というのは適当ではない。

２点目は、自分のチームが「リード」していない状態では説明が不可能であるということである。次の例文を見ていただきたい。

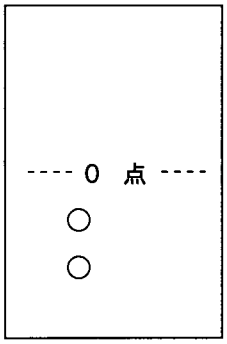
（４）　０対０で試合が推移していたが９回にホームランで２点を失った。

まず、（４）についてコメントしておくと、(2a)や(2b)と同じメカニズムが働いたように解釈すれば、「０対０」の０点から２点減じられて自分側の得点が「－２点」になる。しかし、実際には「０対０」で、「２点

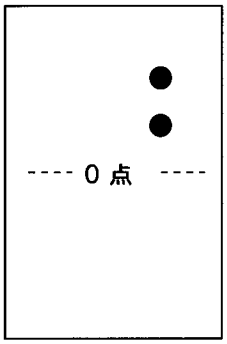
を失った」とき、当初「０点」だった自分の得点から２点減じられて「－２点」になることはない。(４)においては、「失う」という事象を通して、当初「０点」しかなかった相手チームの得点が「２点」に増えるのである。確認のために、例文(４)を視覚的に示すために、[図12a]から[図12c]を導入する。[図12a]は、(４)において「２点を失う」前の状態である。(４)の「失う」の意味を(2a)や(2b)と同じように解釈すれば、[図12b]が描くように、「０点」から「２点」が減じられて「－２点」になるということになるが、すでに確認したように(４)の意味はそうではない。実際には、[図12c]が描くように、自分のチームの「０点」に変化はなく、相手チームの「０点」に「２点」が加えられて、結果的に「０対２」になるというものであった。



[図12a]０対０



[図12b]－２対０



[図12c]０対２

さて、(４)において、[図12a]が示すように、自分のチームがリードしているとも、相手のチームが「リード」しているとも言えない。自分のチームが「２点を失う」ことで、相手のチームが得点を得るときに「リード」が存在しない以上、「リードが失われる」ことはありえない。

以上の２点によって「『リード』のうちの２点を失った」という主張があてはまらないのは明らかであろう。

第５節：まとめ

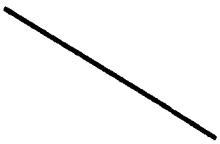
本章の議論を通して、以下のことが確認された。イメージスキーマを導入することで多義構造を分析する際、類義的な関係にはプロファイルの場所に帰着して説明可能だが、「失う」や「奪う」のように多義に対

義的な関係があるものには、図地反転の原理を援用しなければ最終的な説明を加えられない。

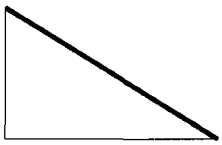
注

[１][図1a]から[図1c]において、右側の円が左側の四角よりも小さく描かれているが、実際には[図1c]においては、第２章の第３節で分析したとおり「暴風域」よりも「日本列島」のほうが小さく、大きさの関係は逆になる。なお、国広(1997:196)は本研究で取り上げている「さす」についても、構造を図示したうえで分析を行っている。

[２]例文(１)の詳細な分析については、第１章の第１節にある例文(４)を御覧いただきたい。また、[図３][図４][図５][図８][図９][図10]も「●」や「⟶」「⟵」のように太くなった部分がプロファイルされた部分である。プロファイル(profile)とは言語使用者が特に注目し、際だちの大きい部分構造であり、そこで想起される概念内容全体をベース(base)と呼ぶ。例えば「斜辺」の意味を規定するのに、下の左側の図のように１本の直線のみを想起するだけでは不十分であり、右側の図のように直角三角形という３本の直線からなる形状全体を想起しなければならない。ここで、想起された直角三角形が「ベース」であり、右の図の太線で示された斜辺のように直接指し示している部分がプロファイルされた部分ということになる。



「斜辺」



直角三角形と斜辺

プロファイルとベースという概念は、第１章の第２節で詳説した図と地の概念が基盤になっており、プロファイルされた部分が「図」にあたり、ベースが「地」にあたる。なお、プロファイルについては、本多(2003:76)、松本(2003:67)で平明に説明されている。さらに、籾山・深田(2003:107-109)において、概念化とのかかわりで記されているほか、吉村(2004:71-72)は動詞の構造について、プロファイルを用いて説明している。

[３]例文(２)や(３)に見られる３種類の用法を、多義とみなすかどうか

は議論の余地も大きいと思われるが、ここでは、それぞれの意味の差異に、簡単にコメントしておくことにする。

[4]戸田・阿部・桃内・往住(1986:132)では期待値のことをデフォルト値としていて、ここでは暫定的にデフォルト値として＜自分の領域＞と＜別の領域＞を置いている。デフォルト値はあくまでも暫定的な値であり、言語、文化、習慣、あるいは個々人によって変わることがあり、具体的な事例の中で実際の値が決まれば制約されることなく変更されるものである。

第5章　格標示の動静関係に関する補説

本章では、格標示されたものの動静関係の基本的なパタンを振り返るとともに、他動性という概念を用いて、動詞が自動詞と他動詞に二分されるのではなく、連続的であるとするものについて触れておく。

第1節：動静関係と格標示に関する一般原則

第1章と第3章において、言語表現上の図地反転現象を分析する際、「典型的な自動詞構造」や「典型的な他動詞構造」という用語を使ってきた。認知言語学的な研究では、自動詞と他動詞の区分に関して、角田(1991, 2005)にあるように、プロトタイプ分析を受け入れ、両者を画然

と区分することを回避し、両者を連続的に性格づける手法が支持されている。本研究も、明確に自動詞と他動詞が峻別できないことを承知したうえで、「典型的な自動詞構造」という用語が「対格を実現せず、主たる変化が主格成分に生じる構造」を指し、「典型的な他動詞構造」が「対格を実現し、対格に主たる変化が生じる構造」を指すものとしてきた。本節では、具体的な例文を分析し、「典型的な自動詞構造」および、「典型的な他動詞構造」の文において、どの格に主たる変化が生じるかを論じ、文の基本的構造をあらためて明らかにしていく。はじめに自動詞構造の文を分析し、つづいて他動詞構造の文を分析していく。[1]

それでは自動詞構造の文の分析に入っていこう。上述したとおり、本研究の第１章と第３章における分析の立場では「典型的な自動詞構造」とは「対格を実現せず、主たる変化が主格成分に生じる構造」ということである。本節で分析する自動詞構造の文は「ガーニ」「ガーカラ」「ガーデ」の形式を持つものであり、具体的な例文を挙げて順に分析を行っていく。

最初に「ガーニ」形式の文を取り上げる。「ガーニ」形式の文は対格をとらない自動詞構造の文であるから、主格ＮＰが主たる変化を被る。

（１）（ａ）　太陽<u>が</u>水平線<u>に</u>沈む。
　　（ｂ）　花子<u>が</u>部長<u>に</u>昇進した。

(1a)のように物理的な位置変化を表す表現において、(厳密な物理学的な意味ではなく)空間的に移動すると知覚されているのは、明らかに、主格ＮＰ「太陽」であって、この(1a)は、発話されるような日常的な文脈で考える限り、与格ＮＰ「水平線」に位置的な変化も状態的な変化もない。また、(1b)のような状態変化の場合でも、「花子」に最も大きな変化が生じていることは明らかであろう。ただ、ここで言う「主たる変化」あるいは「より大きな変化」というのは、複数のＮＰがある中で、それらに生じうる変化の程度が同等ではなく、相対的に変化の度合いが大きいほうの変化を指す概念である。この点から言うと、(1b)の「部長」というポストに着目すれば、前任者から「花子」へと人物(在任者)が変化したという意味で、変化があったことは否定できないけれども、「花子」が課長などの他の役職から「部長」に昇格したという「花子」自身

に起こった変化と、「部長」というポストにおける、ある人物から「花子」への人物の変化との対比において、前者に、より大きな変化が認められているというのが本研究の立場である。この観点に立てば次の例文の主たる変化がどこにあるか分かるであろう。

（１）（ｃ）　今度の人事異動で部長が花子に交代するそうだ

(1c)は(1b)とほぼ同様の内容を表しているが、当該の事象の中で与格ＮＰ「花子」よりも、主格ＮＰ「部長」の変化が大きいことが描かれていると理解できよう。与格ＮＰ「花子」に他のポストから部長になったという変化はあるにせよ、主格ＮＰ「部長」というポストにおける人物が変更されたことのほうがより大きな変化があると知覚されたのであり、それが反映されて記号されたのが(1c)ということになる。

自動詞構造において、主格ＮＰの変化が他のＮＰよりも相対的に大きいということは、次の「ガーカラ」形式の文でも確認できる。

（２）（ａ）　太陽が水平線から昇る。
　　（ｂ）　花子が課長から降格した。

（２）においても（１）同様、より大きな変化が認められるのは、主格ＮＰの「太陽」や「花子」であって、奪格ＮＰの「水平線」や「課長」ではない。(2a)は(1a)同様、主格ＮＰ「太陽」が空間的に移動しているのであって、奪格ＮＰ「水平線」に位置的な変化も状態の変化もない。また、(2b)では(1b)同様、奪格ＮＰ「課長」という役職の人物が主格ＮＰ「花子」から、誰か他の人になるという変化があることは否定できないが、「花子」が被った変化、つまり「課長」から「課長」よりも下の役職になったという変化のほうが、相対的に大きいと認められている。この観点に立てば、(2c)の主たる変化がどこにあるか明らかであろう。

（２）（ｃ）　課長が花子から交代した。

(2c)を(2b)と比較してみたとき、当該の事象の中で奪格ＮＰ「花子」よりも、主格ＮＰ「課長」の変化が大きいことが描かれていると理解でき

よう。奪格ＮＰ「花子」に課長から他のポストになったという変化があることは否定できないが、主格ＮＰ「課長」というポストにおける人物が変更されたことのほうが、より大きな変化があると知覚されたのであり、それが反映されて記号されたのが(2c)ということになる。

「ガーデ」形式の文も、「ガーニ」形式や「ガーカラ」形式の文と同様に自動詞構造であるから、主格ＮＰの変化が具格(デ格)ＮＰよりも相対的に大きいということが(３)のペアから具体的に確認できる。

(３)(ａ)　トランポリンで太郎が運動をする。
　　(ｂ)　太郎が飛行機で本社に向かった。

(3a)において、「太郎」が「トランポリン」の上で、跳ね上がり、ときには高くジャンプする様子を描くとき、主格ＮＰ「太郎」は具格(デ格)ＮＰ「トランポリン」に働きかけることによって、上下に動くなどの大きな変化をする。「トランポリン」も動くことは否定できないが、「太郎」が上下に動く度合いのほうが相対的に大きいと認められている。一方、(3b)において、主格ＮＰ「太郎」が移動するとき、具格ＮＰ「飛行機」も移動することは明らかであるが、ここでの着目点、話題の中心は主格ＮＰ「太郎」であり、より変化を被ったのは主格ＮＰ「太郎」と知覚されていると言えるであろう。もちろん、物理的な変化においては具格ＮＰ「飛行機」の移動は大きなものであることは否定できないが我々の注目度、つまり、どこに焦点を置いて表現されているのかという観点でこの文を解釈した場合、主格ＮＰ「太郎」の変化が大きいと判断されると思われる。(3b)において主格ＮＰの変化が具格ＮＰよりも大きいと知覚されることを示すために、[図１]のようなアンケート調査を試みた。アンケート内容は(3b)が会話の中で発話されるとき、その返答として「私も見たよ」と回答した場合、「見た」のは「太郎」と「飛行機」のどちらと思うかを選択してもらったものである。また、結果を比較することで、より有益な分析をするために、具格ＮＰには「飛行機」のほかに、「自転車」「バス」「電車」を使用し、アンケート調査を試みた。

これは皆さんの知識や学力を試すものではありません。日本語の意味構造を調べるためのテストですので、結果を気にすることなく、直感でお答え下さい。

次の(1)～(4)の会話文の中で、Aさんの発話に対して、Bさんの立場で「私も見たよ」と答えたとき、Bさんが見たのは何であると考えるのが自然と感じますか。下線部を付けた2つの候補の中から1つを選んで下さい。

(1) A　太郎が自転車で本社に向かったよ。
　　B　私も見たよ

太郎　自転車

(2) A　太郎がバスで本社に向かったよ。
　　B　私も見たよ

太郎　バス

(3) A　太郎が電車で本社に向かったよ。
　　B　私も見たよ

太郎　電車

(4) A　太郎が飛行機で本社に向かったよ。
　　B　私も見たよ

太郎　飛行機

[図1]アンケート用紙

調査は、神戸学院大学と兵庫教育大学に通う大学生187名を対象に、4回に分けて行った。実施の詳細は[図2]に示すとおりである。

年月日	時間	学校	学年	授業名	人数
2005年 7月 1日	4時間目(15:00～16:30)	神戸学院大学	主に大学3年生	言語文化方法論Ⅱ	89
2005年11月15日	3時間目(13:15～14:45)	神戸学院大学	主に大学2年生	言語文化方法論Ⅰ	38
2005年11月16日	3時間目(13:10～14:40)	兵庫教育大学	主に大学1年生	言語	41
2005年11月28日	5時間目(16:30～18:00)	兵庫教育大学	主に大学3年生	国語学演習Ⅰ	19
合　計					187

[図2]アンケート調査実施概要

アンケート調査を例文ごとに主格の「太郎」を選択したか、具格の「乗り物」を選択したかを集計したものが[図３]である。「乗り物」とはアンケートにおける例文(１)では「自転車」、(２)では「バス」、(３)では「電車」、(４)では「飛行機」である。例文番号が大きくなるにつれて具格で標示される乗り物が物理的に大きくなっていることに気づいていただけただろうか。

例文番号(乗り物)		1(自転車)	2(バス)	3(電車)	4(飛行機)
人数	太郎	171	148	159	118
	乗り物	16	39	28	69
パーセント	太郎	91.4%	79.1%	85.0%	63.1%
	乗り物	8.6%	20.9%	15.0%	36.9%

[図３]アンケート結果(太郎と乗り物のどちらを選択したか)

[図３]から伺えることは例文番号が進むにつれて主格ＮＰの「太郎」を選択する人数(割合)が減少しているということである。具格ＮＰが「自転車」のときは９割以上の人が主格ＮＰ「太郎」を選択しているが、具格ＮＰが「飛行機」になると主格ＮＰ「太郎」を選択する人は６割程度となってしまう。しかし、ここで注目していただきたいのは、具格ＮＰの大きさである。上述したとおり、例文番号が進むにつれて具格ＮＰの指すものは大きくなっているのであり、【自転車＜バス＜電車＜飛行機】という関係が成り立っているのである。例文(４)では具格ＮＰ「飛行機」の大きさが、人間である主格ＮＰ「太郎」に比べて非常に大きいにもかかわらず、主格ＮＰ「太郎」を選択する人のほうが多いということが重大なのである。この結果は、我々が主格に標示されるものを実際の動きは別として、相対的に動きが大きいと判断することを示している。言い換えれば、表現者は相対的に変化の大きいと知覚したものを、主格ＮＰに置くのである。[図３]のアンケート結果は主格ＮＰの変化が、具格ＮＰに比べて相対的に大きいと判断しているとする十分な結果だと思われる。ただし、アンケート結果からも分かるように、この判断がすべての人に一様ではないということは確認しておかなければならない。[2]

以上、典型的な自動詞構造の文を分析したうえで「ガーニ」「ガーカラ」「ガーデ」の形式のすべてにおいて、主格に主たる変化が生じることが確認された。

さらに、上述の観察にしたがえば、次のような例における微妙な差異が説明される。

(4)(a)　太陽が雲に隠れた。
　　(b)　太陽に雲がかかった。

(4a)と(4b)を比較して分析することで、その差異が分かりやすくなるであろう。(4a)では与格ＮＰ「雲」が移動する可能性は否定できないが、主格ＮＰ「太陽」の光が見えなくなったり、暖かみが感じられなくなったりするなどの変化に相対的に大きな変化を認めたために、主格に「太陽」が標示され、与格に「雲」が標示されているのである。それに対し、(4b)は「太陽」の変化というより、「雲」が物理的に移動するという点に着目されていて、その変化が「太陽」における変化よりも相対的に大きいと知覚されたため、主格に「雲」が置かれ、与格に「太陽」が置かれた形で言語化されているのである。一見、まったく同じことを表しているようで、我々の知覚の仕方が格標示にあらわれている証拠と言えよう。

次に分析をするのは、他動詞構造の文だが、すでに確認したとおり、「典型的な他動詞構造」が「対格を実現し、対格に主たる変化が生じる構造」を指すものとしてきた。もちろん、自動詞と他動詞を画然と区別することができないことは承知のうえで「ガーヲ」形式の文を他動詞構造の文としている。次の例文を見ていただきたい。[3]

(5)(a)　太郎が花子を殺す。
　　(b)　太郎がプラモデルを作った。

(5a)は、主格ＮＰ「太郎」の行為が対格ＮＰ「花子」におよび、「花子」を生きている状態から死んでいる状態へと変化させていることを表している。主格ＮＰ「太郎」が殺すためにナイフで刺したり、ピストルで撃ったりという何らかの行為を行ったことは否定できないけれども、対格ＮＰ「花子」には、生から死へという決定的な変化が生じており、対格ＮＰ「花子」が被った変化は主格ＮＰ「太郎」と比べ、相対的に大きいのは明らかである。(5b)では、主格ＮＰ「太郎」が作業を行って、対格

ＮＰ「プラモデル」がパーツの段階から完成に至ったことを表している。(5b)でも主格ＮＰ「太郎」が組み立て作業をするという意味で動いていることは否定できないけれども、対格ＮＰ「プラモデル」がパーツの状態から１つの形あるものに変化していったという全体的な変化があることと比べると、対格ＮＰ「プラモデル」の変化のほうが主格ＮＰ「太郎」の変化よりも相対的に大きいと認められるであろう。

ここまでの議論の中で、基本的な構造として自動詞構造の文は主格に主たる変化が生じ、他動詞構造の文では対格に主たる変化が起こることが確認された。[4]

第２節：他動性に関する補説

第１章と第３章において、図地反転を利用して言語現象を分析するにあたって、「典型的な自動詞構造」と「典型的な他動詞構造」を区別したうえで議論を続けてきた。この考え方は、本研究の分析を行ううえで、非常に有効であり、鳥飼(1993)のように自動詞、他動詞を弁別することを主張する考え方もあり、伝統的に支持されてきたと言える。実際、この考え方が、かつては支配的で、田中(1988:319-321, 693-694)では、自動詞が統語的には目的語をとらず、意味的には主語の動作や行為が他におよばない動詞とし、他動詞は統語的には目的語をとり、意味的には主語の動作や作為が他におよぶ動詞としている。さらに、他動詞文は原則として受動文に変えることができるとしている。同様の定義を、国語学会(1955:504-506, 624)、松村(1971:298, 442-443)もしている。奥津(1967:47)は「自動詞は目的語をとらず、他動詞は目的語をとる、という著しいちいの[ママ]があることを認めなければならない。そして名詞につく格助詞の「ヲ」が、目的語の目印となる」とし、目的語は「ヲ」によって標示されることを述べ、他動詞が対格をとることを認めている。こうした従来使われてきた自動詞と他動詞の特徴をまとめたものが[図４]である。

	統語		意味
	目的語	受動文	主語→他
自動詞	×	×	×
他動詞	○	○	○

[図４]自動詞・他動詞の特徴

この定義は本研究で採用してきた、「典型的な自動詞構造」という用語が「対格を実現せず、主たる変化が主格成分に生じる構造」を指し、「典型的な他動詞構造」が「対格を実現し、対格に主たる変化が生じる構造」を指すとしてきたことと一致する。しかし、この定義の問題点は「形の側面(統語的側面)」と「意味の側面」が区別されないで、「自動詞」と「他動詞」が分けられている点や、主語、目的語などの用語の定義が明確ではないということである。[5]

こうした矛盾を生じさせないために、認知言語学的な研究では、他動詞と自動詞の区分に関して、「他動性」という概念を取り入れ、両者を画然と区分することを回避し、両者を連続的に性格づける手法が支持されている。「他動性」とは、他動詞が持つ性質をいくつかの特徴の束として複合的にとらえたもので、最もプロトタイプ(典型)的な他動詞から最もプロトタイプ的な自動詞までを連続的に特徴づける概念である。本節では、本研究における分析とは一線を画する形で動詞を他動性によって、連続的に分類できることを確認していく。

「他動性」を使って、角田(1991:63-116)はHopper & Thompsonの研究に基づき、日本語をはじめ、様々な言語を分析している。角田は、汎言語的に通用する定義として、他動詞文のプロトタイプと他動詞のプロトタイプを設定する際、「意味の側面」と「形の側面」を明確に区別し、「意味の側面」から、形のプロトタイプを導き出している。他動詞文の意味的側面のプロトタイプを「参加者が二人(動作者と動作の対象)またはそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。」とし、他動詞のプロトタイプを「相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞。」と定義している。具体的な動詞として「殺す、壊す、傷つける、作る、改良する、増やす、減らす、動かす、止める、溶かす、温める、隠す、覆う、与える、送る」を挙げている。さらに他動性の測定方法として、意味と形の側面を分けたうえで、次の基準を設けている。意味の側面としては、参加者が2人以上(2つ以上)であり、動作が対象におよび、その上、変化をおよぼすこととしている。また、形の側面としては、[図5]に示すとおり、「ガーヲ」構文になり、直接受動文が可能、間接受動文が可能、再帰文が可能(「自分を(または、自分自身を)･･･する」)、相互文が可能(「お互いに･･･する、･･･し合う」)

としている。これらの形の側面は意味の側面から導き出されたものであり、意味的に他動性の高い文が結果的に上記のような形をとるのである。

形	例　　文
「ガーヲ」構文	太郎が花子を殺した
直接受動文	花子が太郎に殺された
間接受動文	私は太郎に花子を殺された
再帰文	太郎が自分自身を殺した
相互文	太郎と花子が(お互いを)殺し合った

[図５]他動性の形の側面

他動性の条件をすべて満たせば、典型的な他動詞構造ということになり、他動性の条件がなければ、典型的な自動詞構造ということになる。そして、それらの間には、いくつかの条件を満たしている動詞が連続的に並ぶということになる。ただ、以下のような問題点が指摘されることがある。(６)(７)のペアは自動詞とされているのに受動文が可能である。

(６)(ａ)　太郎が死んだ。
　　(ｂ)　太郎に死なれた。

(７)(ａ)　雨が降る。
　　(ｂ)　雨に降られる。

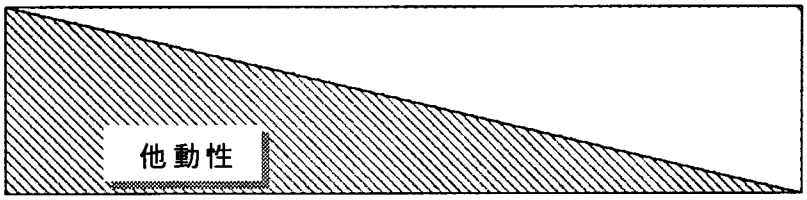
また、下の例文のように否定文と肯定文で格標示が違うものもある。

(８)(ａ)　生徒には自分の将来が予測できない。
　　(ｂ)　生徒が自分の将来を予測できる。

(９)(ａ)　子どもには自分のやっていることが分からない。
　　(ｂ)　子どもが自分のやっていることを分かる。

以上、他動性という観点から自動詞、他動詞の認定について概観したが、他動性という概念は、明確に自動詞、他動詞を区別することを避け、[図６]が示すように、他動詞の条件(＝他動性)をすべて満たしているいる

ものから、まったく持っていないものまで連続的に並んでいるするものである。[図６]では斜線部分を他動性としていて、その他動性が高ければ、他動詞に、低ければ自動詞になることをイメージ的に示したものである。



他動詞　―　中間的な動詞　―　自動詞

[図６]他動性と動詞の関係イメージ

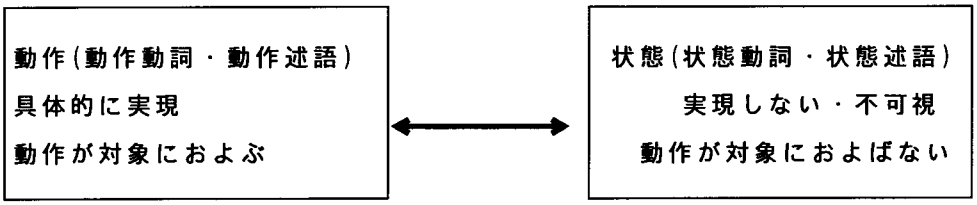
もう少し話を進めてみよう。角田(1991:94-114)は、他動性との関連の中で、具体的に動詞を分類することを試みている。二項述語に関するものだけであるが意味の側面としては動作が対象におよぶ度合い、形の側面としては、[図７]に挙げたように、他動詞のプロトタイプの格枠組みの出やすさの度合い(日本語の場合「ガーヲ」)、受動文、再帰文、相互文の作りやすさの度合いで分類している。[6]

	「ガーヲ」構造の原型他動詞文		「ガーニ」構造の文
構　文	太郎が花子を殺す		太郎が花子に似る。
受動文	花子が太郎に殺される	*	花子が太郎に似られる
再帰文	花子は自分自身を殺した。	*	花子が自分自身に似た。
相互文	太郎と花子が殺し合った。	*	太郎と花子が似合った。

[図７]「ガーヲ」構造と「ガーニ」構造の比較

「意味の側面」と「形の側面」の双方の基準に沿って、動詞を分類したものが、[図８]の二項述語の分類表である。「項」とは、形の側面でとらえると、名詞句ということになり、３ページで取り上げた「参与者」と同じである。二項述語とは、２つの名詞句をとる述語ということになる。なお、[図８]の上部にある２つの四角の中の説明は、角田の表を分かりやすくするために付したものでり、左右の四角の中の特徴が、それぞれ、端に行くほど強いということになる。また、角田は様々な言語について分類を試みているが、[図８]では、日本語と英語だけを抜粋して

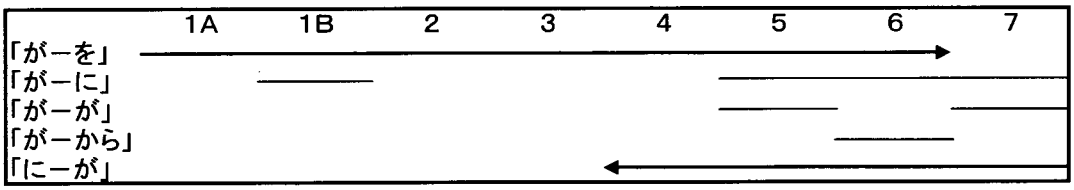
ある。なお、[図８]で特に問題にしたいのは他動性であり、表の左に行くほど他動性が高く、１Ａに分類されるものが他動詞のプロトタイプということになる。右に行くほど他動性が低く、自動詞ということになるのだが、[図８]では形容詞、形容動詞が出現してきている。これは、動詞と連続した形で形容詞、形容動詞も位置づけられることを示しているが、ここでは、その点については触れない。



類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
例	殺す、壊す、温める	叩く、蹴る、ぶつかる	see、hear、見つける	look, listen	待つ、捜す	知る、分かる、覚える、忘れる	愛す、惚れる、好き、嫌い、欲しい、要る、怒る、恐れる	持つ、ある、似る、欠ける、成る、含む、対応する	できる、得意、強い、苦手、good、capable、proficient
日本語	主ー対	主ー対 主ー与	主ー対		主ー対	主ー対 与ー主	主ー対 主ー与 主ー主 与ー主	主ー対 主ー与 主ー奪 与ー主	主ー与 主ー主 与ー主
英語	主ー対	主ー対 主ー at 主ー on 主ー into	主ー対	主ー at 主ー to	主ー対 主ー for	主ー対 主ー of	主ー対 主ー of 主ー with	主ー対 主ー to 主ー in 主ー of	主ー at 主ー of 主ー in

[図８]角田(1991:95)の二項述語の分類(日本語と英語のみ抜粋)

角田(1991:112)によると、[図８]における分類に沿った形の格枠組みは、[図９]のようになる。図の最上部にある「1A」から「7」は、[図８]の「類」と対応し、傍線の引かれている部分が、その格標示が出現する部分である。



[図９]角田(1991:112)の日本語の二項述語の格枠組み

ここで注目すべきは、本研究で「典型的な他動詞構造」としていた「ガーヲ」形式の文が、かなり他動性の低い動詞にまでも出現するということである。ただし、1Bで「ガーニ」形式が出現しているものの、他動性が高いものほど「ガーヲ」形式が出現しやすいとは言えそうである。

以上から、自動詞と他動詞は明確に区別するのは難しいと言える。ただし、自動詞と他動詞を二分することはできないものの、動詞を他動性の高いものから低いものへと序列することは可能である。

第３節：まとめ

第１節で「典型的な自動詞構造」が主格に主たる変化が生じ、「典型的な他動詞構造」が対格に主たる変化が生じることが確認された。第１章と第３章では、分析上の手続きとして、こうした考え方を採用したからこそ、有益な研究成果が得られたと思われる。もちろん、第２節で見てきたとおり、動詞の分類については「他動性」を用いて、明確な分類を避けるという手法が、動詞分類の実態に即しているということは承知したうえであることは付け加えておきたい。

注

[１]角田(1991, 2005)はHopper and Thompsonの他動性の研究について紹介している。他動性と自動詞、他動詞の認定をめぐる問題については次節で論じる。

[２]具格を「バス」で標示したアンケートの例文(２)が、例文(３)の具格を「電車」で標示した文よりも、「太郎」の選択率が低いことは結果のとおりだが、ここでの分析には影響を与えないと思われる。ただ、物理的な大きさだけで単純に選択率が比例しないことは検討に値するだろうが、ここでは議論しない。

[３]角田(1991:72, 76)も他動詞構造の文において、主たる変化は基本的に対格に生じるとしている。また、定延(1990:49)は、２つの構成物でより変化を被るものを表す名詞句が、「ガ」または「ヲ」で表されるとしているが、他動詞構文、自動詞構文については言及していない。

[４]もちろん、他動詞構造における、すべての対格ＮＰが積極的に変化

を被るというわけではなく、実際、例えば、「花子を待つ」や「景色を見る」などにおいて、「花子」や「景色」に変化が認められないことは明らかである。これは対格を持つ文が必ずしも対格に変化が起こるというわけではないことを示す。こうした問題は他動詞文、自動詞文の認定について意味の側面と形の側面が必ずしも一致しないことを示している。この点については次節で、他動性との関連で論じていく。

[5]角田(1991:65)は文法を研究する際、形の側面と意味の側面を区別し、両者にどのような対応があるか、食い違いがあるかを調べることの重要性を説いている。また、「主語」や「目的語」については厳密に考えると非常に難しく、定義することは困難なカテゴリーであり、ここでは議論しない。

[6]「殺す」は二項述語とされているのに、「一昨日 湖畔で 太郎が 花子を ナイフで 殺した。」のような文を作れる。この文は名詞句が5つあるにもかかわらず、「殺す」を五項動詞とは言わない。こうしたことは、角田(1991:90)も認めているとおり「項」の定義の難しさを示しており、ここで使用している「二項述語」というのも、一般的な分類に沿っている。また、ここで言う「形の側面」もプロトタイプの他動詞文の意味の側面から導き出されたものである。

終章　結論

本研究では、動静関係を含む現代日本語を考察対象とし、知覚心理学の概念である、図地分化および、図地反転の原理を援用することで、事象における動静関係が絶対的なものではなく、知覚の様式によって相対的であることを論じてきた。本研究で取り上げた現象は、特殊な文脈の特殊な表現ではなく、我々が日常的に用いる卑近な表現にも観察される。こうした分析を通して、図地反転が言語事実の説明に決定的に作用するケースを指摘し、言語と知覚に同じ原理が働いていることが確認された。以上から、言語能力が知覚という他の認知機構と関連していることの一

部を示すことができたことが本研究の成果である。本研究において、議論した内容は、次の[ｉ]から[ｖ]に整理される。

[ｉ] 言語表現の中に動静関係の矛盾が含まれるとき、＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞という【仮説】によって説明されるものがある。

[ii] [ｉ]の【仮説】は、知覚的な図地反転の原理が言語表現に反映されたものと思われる。

[iii] [ｉ]の現象が起こるための成立条件は、以下の２つである。
成立条件①＝主格に別の種類の変化が生じるとき
成立条件②＝観察者の変化を固定して、静止している他者を知覚するとき

[iv] 成立条件②は、観察者が視点を他の地点に置くという概念化を行うことで、成り立つ場合がある。この成立条件において、話者が観察者と一致しなければならない。

[ｖ] [ｉ]の【仮説】＜動いているものを固定すると、静止しているものが動くように知覚される＞により、「失う」や「奪う」のように、多義に対義的な関係があるものには、図地反転の原理を援用することで理論的に説明できるものがある。

これらの点について、具体的な実例を挙げながら分析を行ってきたが、本研究ではこうした現象を多義として扱うということはせず、単義論的なアプローチを採用したことで、より自然で包括的な分析がなされたと思われる。

本研究において、「現代日本語の動静関係の相対性」について論じたわけであるが、格標示における動静関係が我々の知覚によって相対的であることが見受けられた。こうしたことから、我々の知覚の仕方によって、言語現象が相対的にあらわれることの一部が提示できたと思われる。もちろん、もっと多くの事象をもって、結論に至らなければならないことは承知しているが、今回の研究が言語研究の発展を少しでも後押しできることを願っている。

参考文献

池上嘉彦　1975『意味論』大修館書店.

上村保子　1994「ゲシュタルト心理学」梅本堯夫・大山正(編著)『新心理学ライブラリー=15 心理学史への招待―現代心理学の背景―』(サイエンス社), pp.235-267.

大堀俊夫　1992a「現代言語学のトピックス⑳ “The bike is near the house./ ?? The house is near the bike.” 〈認知図式と構文〉」『言語』第21巻・第7号(1992年6月号), pp.82-85.

大堀俊夫　1992b「イメージの言語学」『言語』第21巻・第12号(1992年11月号), pp.34-41.

奥津敬一郎　1967「自動化・他動化および両極化転形」『国語学』第70輯, pp.48-66.

国広哲弥　1982『意味論の方法』大修館書店.

国広哲弥　1994「認知的多義論―現象素の提唱―」『言語研究』第106号, pp.22-44.

国広哲弥　1997『理想の国語辞典』大修館書店.

国語学会(編)　1955『国語学辞典』東京堂出版.

佐藤信夫　1993『レトリックの記号論』講談社学術文庫.(1985『レトリックを少々』新潮社.)

塩谷英一郎　2003「認知から見た言語の構造と機能」辻幸夫(編)『認知言語学への招待』大修館書店, pp.183-212.

定延利之　1990「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と、名詞句指示物間の動静関係」『言語研究』第98号, p.46-65.

菅井三実　2000「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻・第二分冊, pp.13-24

菅井三実・黛穂高　2005「言語能力と認知機構の互換性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第27巻, pp.63-71.

田窪行則　1984「現代日本語の『場所』を表す名詞類について」『日本語・日本文化』第12号, pp.89-117.大阪外

国語大学.
田中春美(編) 1988 『現代言語学辞典』成美堂.
辻 幸夫(編) 2002 『認知言語学キーワード事典』研究社.
辻 幸夫 2003 「認知言語学の輪郭」辻幸夫(編)『認知言語学への招待』大修館書店, pp.3-16.
角田太作 1991 『世界の言語と日本語』くろしお出版.
角田太作 2005 「他動性の研究の歴史と今後の期待」『言語』第34巻・第8号(2005年8月号), pp.51-57.
戸田正直・阿部純一・桃内佳雄・徃住彰文
1986 『認知科学入門—「知」の構造へのアプローチ—』サイエンス社.
鳥飼浩二 1993 「自他動詞の認定をめぐる序論」『言語』第22巻・第5号(1993年5月号), pp.96-101.
仁田義雄 1993 「現代語の文法・文法論」『日本語要説』ひつじ書房, pp.11-39.
野村益寛 2003 「認知言語学の史的・理論的背景」辻幸夫(編)『認知言語学への招待』大修館書店, pp.17-61.
本多 啓 2003 「認知言語学の基本的な考え方」辻幸夫(編)『認知言語学への招待』大修館書店, pp.63-125.
本多 啓 2005 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
松本 曜 2003 「語の意味」松本曜(編)『認知意味論』大修館書店, pp.17-72.
松村 明(編) 1971 『日本文法大辞典』明治書院.
籾山洋介 1992 「多義語の分析—空間から時間へ—」カッケンブッシュ寛子(ほか編)『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会, pp.185-199.
籾山洋介 2001 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明(編)『認知言語学論考』No.1, pp.29-58
籾山洋介・深田 智
2003 「意味の拡張」松本曜(編)『認知意味論』大修館書店, pp.73-134.
山梨正明 1993 「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認

知メカニズム」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐって』くろしお出版，pp.39-65.

山梨正明　1994a「日常言語の認知格モデル[２]―格解釈のゆらぎ」『言語』第23巻・第２号(1994年２月号)，pp.100-105.

山梨正明　1994b「日常言語の認知格モデル[３]―意味役割の相対性」『言語』第23巻・第３号(1994年３月号)，pp.106-111.

山梨正明　1994c「日常言語の認知格モデル[６]―意味のモード」『言語』第23巻・第６号(1994年６月号)，pp.104-109.

山梨正明　1995『認知文法論』ひつじ書房.

山梨正明　2000『認知言語学原理』くろしお出版.

山梨正明　2004a「言語に反映される図･地の分化と反転現象」河上誓作教授退官記念論文集刊行会(編)『言葉のからくり―河上誓作教授退官記念論文集』英宝社，pp.49-67.

山梨正明　2004b『ことばの認知空間』開拓社.

吉村公宏　2004『はじめての認知言語学』研究社.

１行32字、１頁33行、１頁あたり1056字、400字換算196枚
(換算式　32字×33行×74頁÷400＝196枚)